

日本語文章の可視化

— 保田與重郎『日本の文學史』の絵解き —

谷口敏夫

1 はじめに

文章の可視化についてはすでに記したことだが*¹、要約すると次のようになる。すなわち、これまでさまざまな事象や知識を記録したり他に伝えたりする方法として、図書のように文章化することが一般に用いられてきた。こういった「テキスト」も、内容を包括的に理解しようとするときや、特定の知識に関して簡単明瞭に伝達しようとするとき、困難さが生じる。文章理解とは、時間軸にそった漸進的な受容と理解であり、画像を把握するような瞬時の認識とは大きく異なる。写真を見ればある程度の範囲で即座に内容を把握できるが、文章は冒頭から終末までのテキストを継続して読むという行為がないかぎり、理解できない。

本論は、このことを「テキストの可視化」によって、すなわちビジュアルな、図解によって解消する方法を実験考察したものである。可視化した対象はテキスト中の用語の出現傾向である。特定テキストの用語出現は、テキストを改変しないかぎり不変であり、テキスト理解にあっては基本的な要素である。これは特定の解釈や思想や了解事項のもつ変動からは独立したものであり、再現性をともなった「客観」をもたらす。

本論考察と実験とは、テキストをその用語出現によって可視化し、得られたグラフからどのような解釈（絵解き）が成り立つのかについて、その可能性を

*1 谷口敏夫「用語の出現傾向を可視化することによる文章理解：宗教的ライフヒストリーの分析地図」2000年4月。

<http://www.koka.ac.jp/taniguti97X/KTCoder/2000LifeHistory/2000LifeHistory.PDF>

まとめたものである。なお、可視化には等高線グラフ^{*2}を用いたことから、以後便宜的にグラフを「地図」と呼称する。

テキストから地図に変換するというような考え方、すなわちメディア変換の意義については、長尾真がマルチメディア情報学の観点からすでに言及^{*3}している。本論は、文学という固有性の極めて高い対象について可視化の可能性と有効性をみたものである。

2 実験・調査の目的と概要

本論内容は、日本語文書から重要語を位置付きで抽出し、その頻度を計り、用語と出現章のクロス表を作成し、このデータを等高線グラフによって可視化した実験結果である。このことによって、複雑な図書内容から、中心となる概念を地図として表示させ、文章理解を容易にすることができた。

対象文章は保田與重郎『日本の文學史』（新潮社、昭和47年）とした。これに一定の操作を加え、グラフにした。一連の実験過程は末尾の付録（Ⅰ）概念地図の見方、および付録（Ⅱ）用語の抽出とクロス表、にまとめた。また可視化によって図書内容から得た6つの概念および追補については付録（Ⅲ）に保田與重郎の文学概念としてまとめ、これを考察した。

3 文章地図

付録（Ⅱ）に記したKT 2 システムによって章単位での各重要語の出現頻度を見、これを可視化し文章地図としたものを図1にあげた。ここにはすでに6つの概念を地図上に記している。本論はこの6概念の妥当性をテキストにあたって論考したものである。

図1は、X軸に23件の重要事項（人名、作品名）を置き、Y軸に文章の序説

*2 グラフ「等高線」はマイクロソフト社製のエクセルを用いた。

*3 長尾真『マルチメディア情報学の基礎』（岩波書店、1999）「言葉は人間の思考を支える基本であるということは、これまで哲学などでも論じられ、広く了解されていることである。しかし一方では、言葉では表現しにくいもの、表現できないものも多く存在する。～マルチメディア技術が発達した今日では、言葉によって表現しにくいものが言葉と同じように便利に記憶され、取り出され、流通され、利用されるようになってきている。」 pp57-58

から後記までを、上方に向けて配置した。各軸の交わる点を中心とする等高線の区切りは頻度5とした。ここでは上限を25頻度としているので、それ以上の高頻度はクラス [20-25] に含まれている。

3. 1 各章の時系列（通時的）データから見た分析：Y軸

地図上の島（用語）の散布は $Y=X$ に近似であり順当な対角線を示している。これはテキストが編年の文学史という叙述形式であることと、X軸をほぼ重要事項の出現順に配置しているからである。すなわち、保田はこの著作を歴史にそって古代から近代にむけて記している。以下に特徴的な箇所をあげて説明するが、この通時的な分析はすでに「日本語文章における重要語の出現位置に関する分析」（光華女子大学研究紀要、36, 1998）で大部分おこなっているので、本論ではその確認といくつかの補遺にとどめておく。なお用語に+が接尾するものは {万葉集、万葉調} のような集合を表している。

◎万葉集+

万葉集について『日本の文學史』では、5～10、14～16、21、22章の合計11章分に頻度5以上の言及がある。過去の研究で明確なように、正確*⁴には1章から22章まで間断なく出現し、ほぼ全編「万葉集」で埋め尽くされていると言ってもよい。保田にとって『万葉集』がどれほど重要な作品であったかが地図の上で明確である。

◎松尾芭蕉+

5、12、20、21、24の合計5章分で頻度5以上を示している。芭蕉も万葉集と並び、保田の文学史では全時代で言及されていると考えて良い。

◎親房+と松尾芭蕉+

この二つは文学史の始まりと終わりに出現している点で対をなしている。親房は序説において保田のたかぶりとともに描かれ、『日本の文學史』を記す際

*4 等高線グラフの区切りを1以下にすると頻度1も図示される。

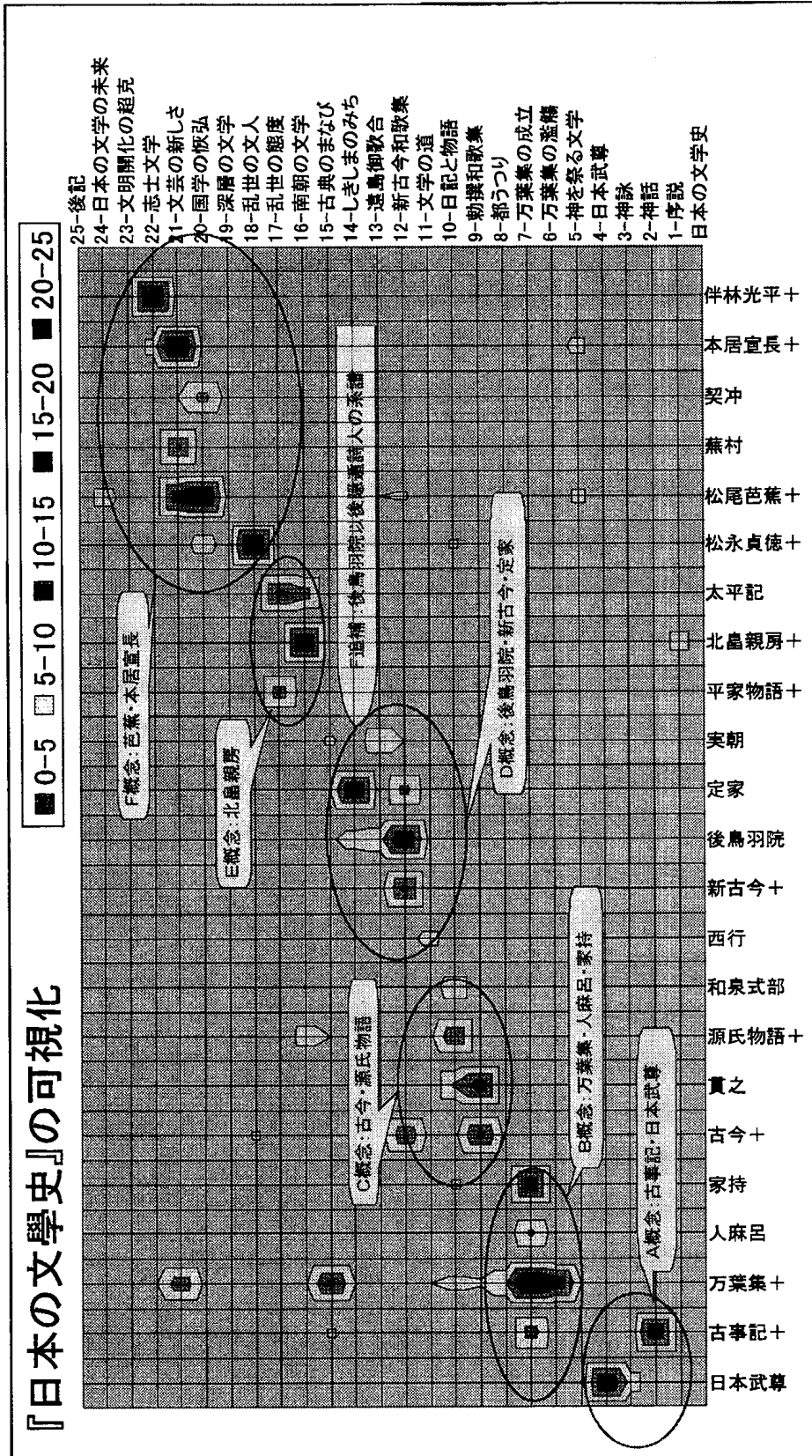


図1 『日本の文学史』の可視化と6概念

の機縁とされている。北畠親房とはすなわち『神皇正統記』*⁵の作者であり、南朝の思想的推進者の中心であった。保田は親房を「文学」のカテゴリーで評価している。

芭蕉は、最終24章にあたる「日本の文学の未来」で他の事項との共起を殆ど示さない状態、すなわち最優先の事項として現れている。この章は時代ジャンルの「近代文学」に該当するが、保田の近代文学に対する冷淡さは特徴的である。この章では川端康成や三島由紀夫への賞賛以外は、近世芭蕉の志にのみ筆を費やしている。これは後述するが、保田與重郎にとっての文学とは「後鳥羽院以降隠遁詩人の系譜」にあり、近世でそれを恢弘したのが芭蕉とし、以後芭蕉の姿に文学を託していることのあらわれである。

保田與重郎は親房を機縁とし文学史を記し、掉尾を芭蕉で飾ったと言えよう。

◎「序説」という特別な章に頻出する重要語

これまでの調査研究から本テキストの序説に現れる用語は図書全体にとって特別な意味を含むものが多かった。図1は区切り間隔が5であるため6頻度以上が表示され、序説部分には北畠親房だけが現れている。しかし実際には表1のように、万葉集、後鳥羽院が頻度5、源氏物語、芭蕉が頻度3というように、他の重要語も一定の頻度を見せている。この中で北畠親房が頻度8を示しているのは、本テキスト成立の上で非常に特異な現象であるといえる。これは戦後の保田の「北畠親房観」が変化したことを意味するが、詳細は付録(Ⅲ) E概念で述べた。

◎通時的なまとめ

地図を通時的にみることにより、『日本の文學史』は万葉集と芭蕉に日本文学を中心をおき、保田の執筆機縁は北畠親房『神皇正統記』にあり、結論に松尾芭蕉をおいたものであると絵解きできる。

*5 『神皇正統記』の扱いは時代によって異なる。十七世紀中頃の徳川光圀『大日本史』以来幕末の尊皇思想に影響を与えている。現代の政治思想的状況の中では明治・大正・昭和初期にかけて称揚され、終戦後以降は長期間禁句となった書物である。

表1 序説に現れた重要語

序説に現れた重要語						
A概念	日本武尊	古事記+				
	0	0				
B概念	万葉集+	人麻呂	家持			
	5	0	0			
C概念	古今+	貫之	源氏物語+	和泉式部		
	0	0	3	1		
D概念	西行	新古今+	後鳥羽院	定家	実朝	
	0	0	5	0	0	
E概念	平家物語+	北畠親房+	太平記			
	0	9	0			
F概念	松永貞徳+	松尾芭蕉+	蕉村	梨沖	本居宣長+	伴林光平+
	0	3	0	2	2	0

3. 2 事項の断面（共時的）データから見た分析：X軸

共時的なデータ分析とは、どのような事項が同時共起するのかを確認し、その理由を考えることである。二つないし三つの重要語がテキスト中に隣り合って同時期に出現したなら、これらの用語間になんらかの関係が想定できる。その想定を基にして、テキストをあらためて読むことで、著者と読者との間に新しい「了解」の生まれる可能性がある。

X軸上には、上代から近代にむけて左から右へ23の事項を並べた。以前の研究*⁶との変更は以下の3点である。

- (1) 新たに「和泉式部」を設けたこと。これは保田の主著に『和泉式部私抄』があることから追加した。
- (2) また、「北畠親房+」には従来から北畠顕家を含ませていたが、今回はさらに『神皇正統記』（頻度12）も入れた。これはテキストを再度分析した結果、あらためて保田にとっての親房および神皇正統記の位置づけの重さを味わったことによるものである。
- (3) さらに「伴林光平+」には『南山踏雲録』をあわせた。これは保田に『評註南山踏雲録』があることによる。

*6 谷口敏夫「日本語文章における重要語の出現位置に関する分析」光華女子大学研究紀要、36(1998.12), pp.19-98

<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/1998/Yasuda9809/Hyasuda98>

谷口敏夫「日本語文章における自動索引の試み」光華女子大学研究紀要、32(1994.12), pp43-63

http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/9404_9503/94Kiyou/HKiyou94.html

◎重要語の選定

以下に23件の重要語に関して考察しておく。重要語選定の規準は用語頻度^{*7}を基本とした。用語内容に関する詳しい解説や解釈は以前調査したものを踏襲した。また、クロス表を作成する際には、抽出用語リスト^{*8}からではなく、文中から直接文字列として選んだ。記号「+」が接尾する語には、文字列の一致だけではない関係用語も含ませた。

01 日本武尊

日本武尊の表記だけがあり、倭建（古事記での表記）はない。文中「尊」や「皇子」が日本武尊をさして使われているが、これは無視した。

02 古事記十 {古事記、記紀}

記紀を古事記に含めた。日本書紀は無視した。なお、本居宣長『古事記伝』なども含まれている。

03 万葉集十 {万葉集、万葉}

「万葉」を含めることによって、万葉調などが選ばれる。また契沖の『万葉代匠記』なども選ばれる。

04 人麻呂

柿本人麻呂である。

05 家持

大伴家持であり、「家持卿」なども含まれる。

06 古今十 {古今集序、古今集、古今序、古今伝授、古今仮名序、古今和歌集、古今源氏}

古今和歌集である。新古今集との異同は確認した。「古今伝授」は古今和歌集のグループとした。「古今源氏」は古今集にだけ含め

*7 谷口敏夫「日本語文章における要約と自動索引」光華女子大学研究紀要, 33(1995.12), pp47-81
http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/9504_9603/95Kiyou/HKiyou95.html

*8 KT 2 システムでは、クロス表を自動作成するKTCrossに選定重要語の検索対象を選択するオプションがある。通常はKTCoderで作成された抽出用語リストを対象とするが、ここでは「文」を直接対象とした。

た。

07 貫之

紀貫之である。

08 源氏物語十 {紫式部、光源氏、源氏物語}

テキストでは単独の「源氏」は源家としてのあつかいだけなので、「源氏」は含まない。「古今源氏」は無視した。

09 和泉式部

『和泉式部集』なども含まれる。

10 西行

「西行庵」なども含まれる。

11 新古今十 {新古今和歌集、新古今集、新古今}

「古今集」との異同は確認した。

12 後鳥羽

後鳥羽院である。後鳥羽院、後鳥羽天皇、後鳥羽上皇などが含まれる。

13 定家

藤原定家である。「定家卿」なども含まれる。

14 実朝

源実朝である。

15 平家物語十 {平家物語、平曲、平氏}

「平氏」は平家物語の中で語られていたので含めた。

16 北畠親房十 {親房、准后、顕家、神皇正統記}

「准后」は北畠親房をのみ指していた。「顕家」は北畠顕家で親房の長男だがここに含めた。『神皇正統記』は親房の著書である。

17 太平記

『太平記』のみである。

18 松永貞徳十 {貞徳、貞門}

「貞門」は、松永貞徳の活動に含めた。

19 松尾芭蕉十 {芭蕉、蕉門、蕉風、蕉翁、奥の細道}

芭蕉の活動を含む用語を集めた。「桃青」はなかった。

20 蕪村

与謝蕪村である。「谷口」単独はなかった。

21 契沖

著書『万葉代匠記』は万葉集に含めた。

22 本居宣長十 {宣長、本居学、本居大人}

「大人」だけでは区別がつかかねるので、「本居大人」に限定し含めた。

23 伴林光平十 {光平、南山踏雲録}

『南山踏雲録』は光平の著書である。

4 概念地図の絵解き

以上、地図の通時的特性と共時的特性から、頻度の周密をおおまかにくくり6領域に分けたものを概念地図（図1）としてすでにあげた。この6つの概略を以下に記す。また、保田の文学史観に固有な「後鳥羽院以後隠遁詩人の系譜」については、F概念とかさなるところがあるので、F概念追補として別に付加した。なおA～F、F概念追補など、各概念の詳細は付録（Ⅲ）とした。

A 概念：古事記・日本武尊

A概念は保田の神話・文学観である。日本文学史の巻頭に古事記をおくことは特別なことではない。しかし、保田與重郎はその中でも日本武尊に大きな比重をおいている。日本武尊の生涯から英雄にして詩人の敗北をみ、そこに日本文学の原型をとらえたのは、保田の優れた神話・文学観として評価すべきことである。三島由紀夫と保田との文学的関連は一言では言えないが、三島の『日本文学小史』*⁹には保田の古事記・日本武尊観と明白な近似性がある。

B 概念：万葉集・人麻呂・家持

保田が最晩年まで執心した万葉集は、歌人として柿本人麻呂およびその長歌

をあげ、編纂者として大伴家持を中心に据えている。人麻呂の長歌は天武天皇御子である高市皇子の^{あらしのみや}殯宮の歌をさし、保田は、高市皇子^{たけちのみこ}を偲んだ人麻呂の歌に、壬申の乱の実相と歌聖人麻呂の嘆きをみた。壬申の乱は天皇家内における叔父甥の争いであり同時に国が危機にひんした内乱であった。こういった時代・精神相を背景に家持は万葉集を編纂した。保田は、『萬葉集の精神』の副題を「その成立と大伴家持」としている。これは保田の歴史観である。

C概念：古今・源氏物語

保田は、万葉集以降低迷した和歌を情理あわせて回復させたのが最初の勅撰集『古今和歌集』であり、紀貫之が記したこの仮名序に「古典」としての意義を認めている。保田は貫之の仮名序の和歌論について、「理を説いて万人の理解に示されたのが貫之の論だった」と述べている。また源氏物語については「物語はただの女ことばの美しさである、うけ答が平行して、諾否を求めず、諾否を認めずといった、ことばの真実世界である。その無内容に驚くべき文明の歴史が藏され、深い人情の秘奥がうつされてある」というように、古典文学の言語観を保田の言葉で記している。C概念は保田の古典文学観である。

D概念：後鳥羽院・新古今・定家

保田の場合、文学史を「人物」としてみる傾向がある。作品がまずあり、次にそれに関連した人々がどのような志をもち何をなしたか。『現代畸人傳』ではさかんに、詩を作らぬ詩人、生きて死ぬことが詩となる詩人という考えを述べていた。この意味で新古今和歌集を批評するよりも隠岐に流されなお歌合をおこなう院御自身に目がむく。

*9 三島由紀夫『日本文学小史』（新潮社、昭和47年）以下の引用はpp37-38。「命」は日本武尊を指す。「政治機能からもはやみ出すにいたつた神的な力が、放逐され、流浪せねばならなくなつたところに、しかも自らの裡の正当性（神的天皇）によつて無意識に動かされつづけてあるところに、命の行為のひとつひとつが運命の実現となる意味があり、そのこと全体が、文化意志として発現せざるをえなくなつたのだ。神人分離とはルネッサンスの逆であり、ルネッサンスにおける如く文化が人間を代表して古い神を打破したのではない。むしろ、文化は、放逐された神の側に属し、しかもそれは批判者となるのではなく、悲しみと抒情の形をとつて放浪し、そのやうな形でのみ、正当性を代表したのである。」

遠島御歌合は嘉禎二年七月となつてゐる。承久三年より数へて十六年目である。この歌合は上皇の御判で、作者は、十六人、すべて八十番だつた。都よりたよりにつけて集められたものである。和歌所の昔のおもかげ、次々に行はれたいつも未曾有な豪華な歌合のことなど思出されつつも、八十番遠島御歌合を遊すその御思召には、王者の堂々の大風懐と、その道に対する不拔不動の信と誠があふれてゐる。(13章：遠島御歌合)

また定家については「大事な時に出て、その時の必要とする大事を、殆ど十分に近くなしとげた人」と高く評価する。D概念は保田の和歌観である。

E 概念：北畠親房

村上源氏の流れをひく北畠家の当主、後醍醐天皇時代（14世紀前半）の公卿、武人、歴史家、政治家。著書『神皇正統記』。保田は「文章の威厳は、神皇正統記に於て、わが国文として初めてあらはれた」と記している。保田は『神皇正統記』を、文章が経国の大業であることの発露であるとする。

文章が経国の大業だといはれた真義や、その布衣の文人^{*10}の信念は、文字で描いた思想といふ如き軽薄のものを指すのでない。文章からあふれて、人にいのちをよび起すもの、この創造の永遠の本願や、悠久を貫く悲願の動くところのことばと声、それが文学であり又詩である。(16章：南朝の文学)

保田はテキスト『日本の文學史』で、親房を戦前に比べて高くしている。戦前の親房は歴史的にも政治的にも偏向した扱いを受けており、保田はこれを是認していなかった。『神皇正統記』の文章批評自体に、保田の清明な皇国観^{すめぐに}^{*11}をみることができる。

F 概念：芭蕉・本居宣長

活躍期からみると芭蕉および契沖『万葉代匠記』が十七世紀末（元禄）に同時代である。その百年後（十八世紀末、1798）、本居宣長が『古事記伝』を完

*10 布衣（ほい）とは狩衣など庶民、無位無冠の者の服装をさす。よって、布衣の文人とは、政治権力機構からは無縁の文人をさす。ただしここでは後述する後鳥羽院以後の隠遁詩人をさす。しかも親房もまた政治的軍事的低迷の中、関東の砦や吉野山中では、ほぼ隠遁詩人に等しかったのかもしれない。

*11 保田與重郎の皇国（すめぐに）観とは、明治政府以来の政治的皇国（こうこく）史観をさすのではない。わが国の文明観および文化観である。

成した。このF概念には松永貞徳、芭蕉、蕪村の俳諧関係者と、契沖、宣長、伴林光平（幕末勤皇志士）の国学関係者が含まれている。この俳諧と国学とを結んだ近世文学観に保田與重郎の特徴が現れている。F概念は保田の近世文学観である。俳諧と国学との結び目は「祝詞」であり、芭蕉が延喜式祝詞を基とする神名帖をたずさえて旅をしたことと、宣長の国学系列に鈴木重胤『祝詞講義』のあることが接点になる。保田にとっての祝詞とは、神を祭る文学である。

祝詞の学問は、近世になつて真淵、宣長をへて鈴木重胤が完成された。重胤は平田篤胤の没後門人となつてゐるが、その考へ方よりも情緒が、その師とは別人だつた。政事についての考へ方もちがつてゐたし、古学の態度も、古に対する感情もちがつてゐた。重胤の「祝詞講義」は、人の仕事の究極を示すやうな驚くべく怖るべき営為だつたが、その基調は宣長に負うてゐる。（5章：神を祭る文学）

F 概念追補：後鳥羽院以後隠遁詩人の系譜

保田の文学史を特徴づけている考へに「後鳥羽院以後隠遁詩人の系譜」という言葉がある。これをF概念追補とし、E概念およびF概念に重なる考へとして地図に記した。歴史的には承久の変以降、鎌倉、室町、織豊、徳川と武家の治世が続き、その間朝廷の風雅、すなわち王朝文学や勅撰和歌集に代表される文化の中心としての求心力がすたれたように見える。しかし保田は、朝廷の風雅は地下（庶民）に伝わり連綿と続いていたと説く。それを伝えた中心が権勢とは無縁な古典を愛する人たちであるとし、これを隠遁詩人と呼んだ。隠遁詩人とは時には幕末の草莽の志士、伴林光平などもさす。保田によれば、芭蕉もまた最大の隠遁詩人であった。これは保田の中世以降の日本文学観である。

保田の日本の文学史に関する見識はほぼこの7つの意味する内容から成り立っている。他の文学者に比較して際だった特徴があるのは、E概念：北畠親房、F概念追補：後鳥羽院以後隠遁詩人の系譜、の2つである。また、これまでの論考からは、この概念領域を全史的に貫くものは、作品としての万葉集、文人としての松尾芭蕉である。

5 まとめ

テキストに使われた高頻度の用語を重要語とし、全体の中でどのように現れているかを可視化したのが本論である。具体的には、保田與重郎『日本の文學史』から人名・作品名に該当する高頻度の用語を23件選びこれを重要語とした。この重要語をKT 2システム（付録Ⅱ）によって章毎の出現クロス表を作成し、これを表計算ソフトウェア・エクセル（マイクロソフト社）の等高線グラフによって地図化した。

この文章地図から6つの概念を抽出し、あわせて7つ目の追補を加えた。これら地図によって明らかになった諸概念を、テキストと照らし合わせその妥当性および意義を絵解きした。このことから、保田與重郎の日本の文学史の全体像が明確になった。

付録 (I) 概念地図の見方

1 クロス表と地図 (等高線図) の概略

付表1 (クロス表)

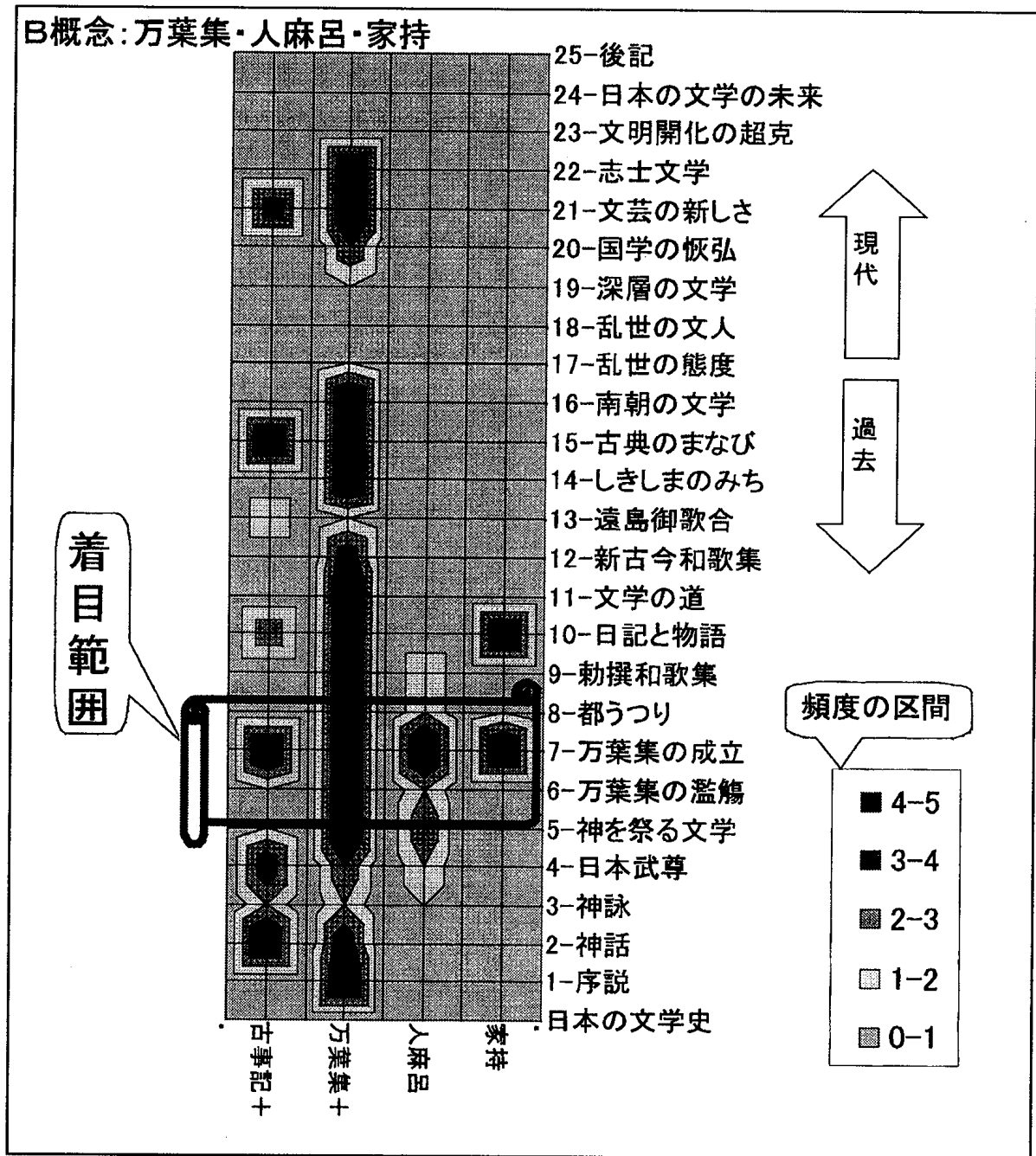
位置	古事記+	万葉集+	人麻呂	家持
日本の文学史	0	0	0	0
1-序説	0	5	0	0
2-神話	21	4	0	1
3-神詠	2	2	1	1
4-日本武尊	4	3	2	0
5-神を祭る文学	1	5	3	0
6-万葉集の濫觴	1	20	2	0
7-万葉集の成立	13	34	11	20
8-都うつり	0	10	2	1
9-勅撰和歌集	0	6	2	0
10-日記と物語	3	7	0	6
11-文学の道	0	5	0	0
12-新古今和歌集	0	4	0	0
13-遠島御歌合	2	1	0	0
14-しきしまのみち	0	5	1	0
15-古典のまなび	6	17	0	1
16-南朝の文学	0	5	0	0
17-乱世の態度	0	1	0	0
18-乱世の文人	0	1	0	0
19-深層の文学	0	1	0	0
20-国学の恢弘	0	3	0	0
21-文芸の新しさ	4	14	0	0
22-志士文学	0	5	0	0
23-文明開化の超克	0	0	0	0
24-日本の文学の未来	0	0	0	0
25-後記	0	0	0	0

付表1はKT2システムで作られたクロス表データを、表計算ソフトウェア (MS社エクセル) に入力し整形したものである。左1列目にはテキストの序説から後記まで全25章を並べてある。2列～5列には、4つの重要語があり、表中にはその各重要語の各章での頻度が数値として記されている。重要語に接尾の+記号は、グループの意味である。たとえば、古事記+には古事記

だけでなく、「記紀」も含まれている。

次に付図1は、付表1のデータをエクセルの等高線グラフ機能で地図化したものである。縦軸は章内容から図の上方が現代に近く、下方が古代になる。横軸には4つの重要語が並べてあり、各重要語の各章での頻度に応じて、図中に等高線が描かれている。

図中左に記した着目範囲は、各A～F概念を説明する際に、明確な概念を形成していると判断した領域を特に明示したものである。このため地図を概念地図とも別称する。B概念を例とするこの図では7章を中心に顕著なパターン (重要語の共時的共起) を見せている。



付図1 (文章・概念地図)

2 地図の詳細 (付図1)

◎図書テキストのどこに使われた語か

この地図は、テキストのどこに重要な語が使われているのかを概略みるためのものである。万葉歌人「家持」の場合、7章「万葉集の成立」と10章「日記と物語」で密度の高いことが一目でわかる。テキスト全体で見ると、家持は下

方（古代）に位置する。このテキストが文学史という性格上古代から現代に向けて書かれていることから、家持は古代（国文学では上古）の人であり、章題から見て万葉集に関係の深い人であることがおおよそ理解できる。しかしなぜ10章にも現れているかは疑問^{I*1}として残り、それが読者に注意を喚起する。可視化の利点は一目で全体と特異点を認識出来るところにある。

◎等高線の特性と注意

エクセルの等高線グラフ機能は、元来3次元の地形概略図などを描くのに適している。しかし本論ではそれを、2次元の文章・概念地図に見立てている。そこで本論での地図を見る場合には多少の注意を必要とする。

まず付図1は、重要語がテキストのどこに密集するかを見るためのものであり、正確な数値（頻度数）を読むためのものではない。重要語の密集を特徴的に表示するために、等高線図グラフの次のような性格を積極的に用いている。

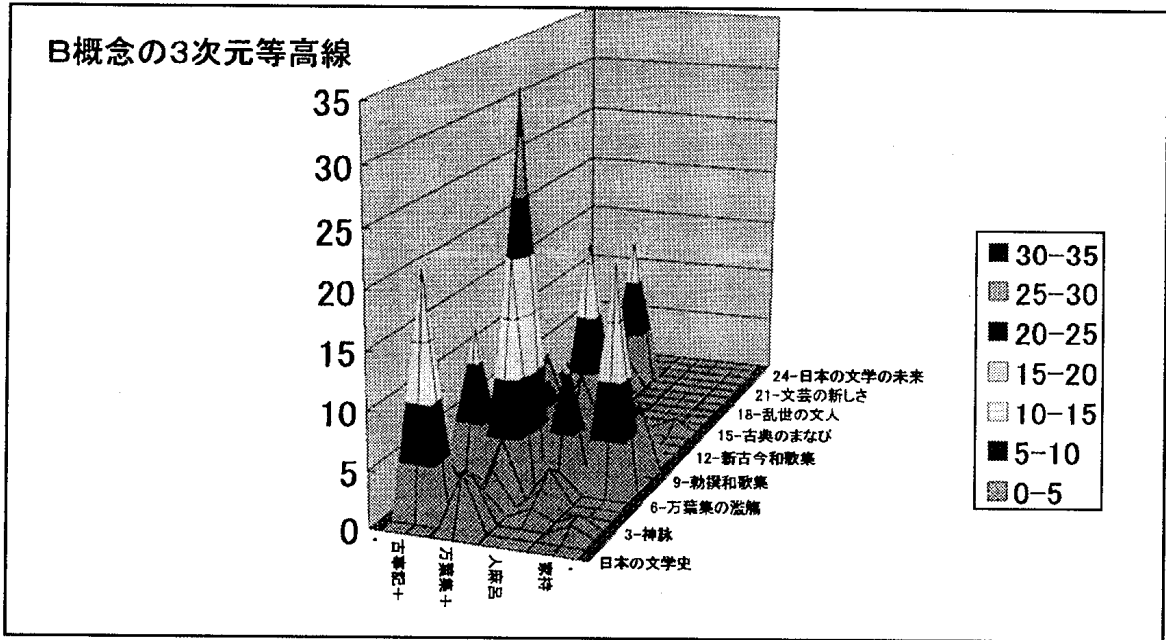
この地図は等高線グラフの持つ点から点への補間機能を用いている。たとえば、「家持」では7章から8章に向けて尖ったパターンを見せている。章間は意味内容としては連続性があるが、実際の表データとしては離散的である。この相互に独立した数値の差を、意味の連続を想定し、図形上で特徴的に表すために補間表示している。もしこれを3次元表示すると、切り立った山を現し2点は稜線として連続している。

補間機能の特殊な具体例として、たとえば「家持」の15章は付表1によれば頻度1を持つが、その前後章が頻度0なので地図上にはない。すなわち、区切りを1とした場合、前後が連続し頻度が0ないし1の章間では、頻度1は表示されない。これは、頻度の差を特徴的に、明確に現すために使われている2次元等高線グラフの性格である。

付図1では前方後円墳のような形状を示す箇所もあるが、これは章間での頻度の程度を連続的に描いた結果である。付図2のように3次元表示にすると高

I*1 保田與重郎の考えでは、家持にはサロンがあり、そういう文学的雰囲気が後の平安時代の女房文学「10-日記と物語」（紫式部や清少納言）に影響を与えているとなる。よって10章での家持の頻度が高くなっている。

さ方向（山の高さや谷の深さ）に解消されるが、全体の中での個々を明示するために本論では2次元表示を用いた。



付図2 (3次元表示：付図1にくらべて、各詳細がとらえにくい)

付録（Ⅱ）用語の抽出とクロス表

全文から用語を抽出し、クロス表を作成する一連の操作はKT 2システムによった。KT 2システムは1999年に川端亮（大阪大学人間科学部）と共同^{Ⅱ*1}で作成した、文章の質的調査をおこなうための基本ツールである。システムは一般的なWindows上で実行でき、ダウンロード^{Ⅱ*2}が可能である。谷口は2000年4月に本論巻頭で言及した宗教的ライフヒストリーを題材にして地図化の実験をおこなった。また一般的な小説の分析^{Ⅱ*3}も現在継続している。

KT 2システムによる作業はおおよそ次のようなものである。

（1）文章の階層定義

文章全体を階層的に把握するため、部章節のレベルでHTMLコードのタグ付けをする。たとえば章タイトルには、<H2> 日記と物語 </H2>、節には<H3> 三節 </H3>のようにマークをつける。このことによって、重要語が全文の中のどの章のどの節のどの段落に現れたかなど、出現位置を確定できるようになる。

（2）辞書の設定

KT 2システムは自動字種切り機能を持つので、辞書はなくてもよい。しかしこの実験では強制抽出用語辞書（複合語を中心とする）として付表2に例示したような約200件を載せた。これらの用語は、KT 2（KTCoder）によって最初に強制的に抽出される。これはあらかじめ明確な用語を一意に、迅速確実に抽出するために設けられた辞書である。

Ⅱ*1 川端 亮『非定型データのコーディング・システムとその利用』（基盤研究（A）（1））研究成果報告書課題番号：08551003、研究代表者 川端亮（大阪大学人間科学部）、1999
谷口敏夫「全文からの「位置情報付き用語」の抽出」

<http://www.koka.ac.jp/taniguti97X/KTCoder/HiTei000.html>

Ⅱ*2 「KT 2システムサイト」

<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/20/KTCoder/KTCoder.html>

Ⅱ*3 「物語とコンピュータ」 <http://www.koka.ac.jp/taniguti97X/Monogatari/Suiri/Suiri.htm>

付表2 (強制抽出用語辞書の内容例)

日本武尊	西行	蕉翁	いはれ	にじみ
古事記	新古今和歌集	奥の細道	いやしい	ひがごと
記紀	新古今集	蕪村	おけ	ひが言
万葉集	新古今	契沖	おごり	ひきのばし
万葉	後鳥羽	宣長	おのが	ひびき
人麻呂	定家	本居学	おのれ	ほととぎす
家持	実朝	本居大人	おほえ	まぐれ
古今集序	平家物語	光平	かみ	まこと
古今集	平曲	南山踏雲録	かみの池	まつり
古今序	平氏	あけぼの	かりそめ	みかど
古今伝授	親房	あこがれ	かりのもの	みささき
古今仮名序	准后	あはれ	きのふ	みそぎ
古今和歌集	顕家	あやしさ	きまぐれ	みち
古今源氏	神皇正統記	ありやう	くらし	みね
新続古今	太平記	いきさつ	くれなゐ	みゆじく
貫之	貞徳	いきづかひ	けしき	みゆとす
源氏物語	貞門	いただき	けぢめ	
紫式部	芭蕉	いつの世	こころ	～ (後略)
光源氏	蕉門	いつの代	ことば	
和泉式部	蕉風	いのち	ことわり	

(3) KT 2 システム

KT 2 システムの各工程を選択するメニューがあり、以下の(4)～(6)を選択できる。

(4) 用語抽出 (KTCoder)

テキスト全文から、自動字種切りおよび強制抽出用語辞書(複合語辞書)、停止語辞書などによって、適切な用語や句を位置情報付きで抽出する。

(5) 頻度統計 (KTHindo)

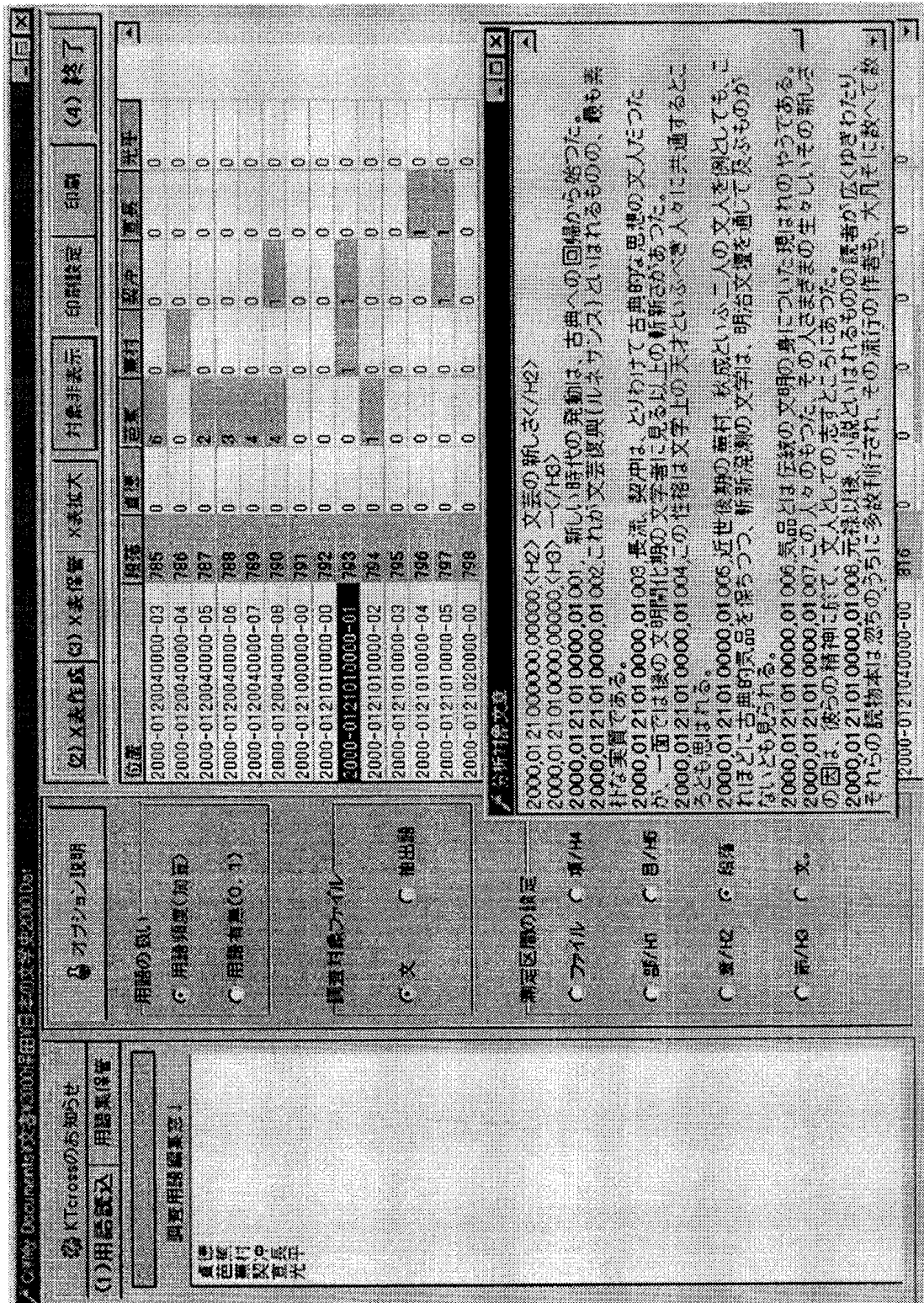
抽出した用語の頻度統計、頻度順リストなどを作成する。

(6) クロス表作成 (KTCross)

様々なオプションによって、用語の出現位置と頻度とのクロス表を作る。付図3を参照。

(7) 地図化

クロス表をエクセル(マイクロソフト社)に読み込み、等高線グラフによって地図化する。



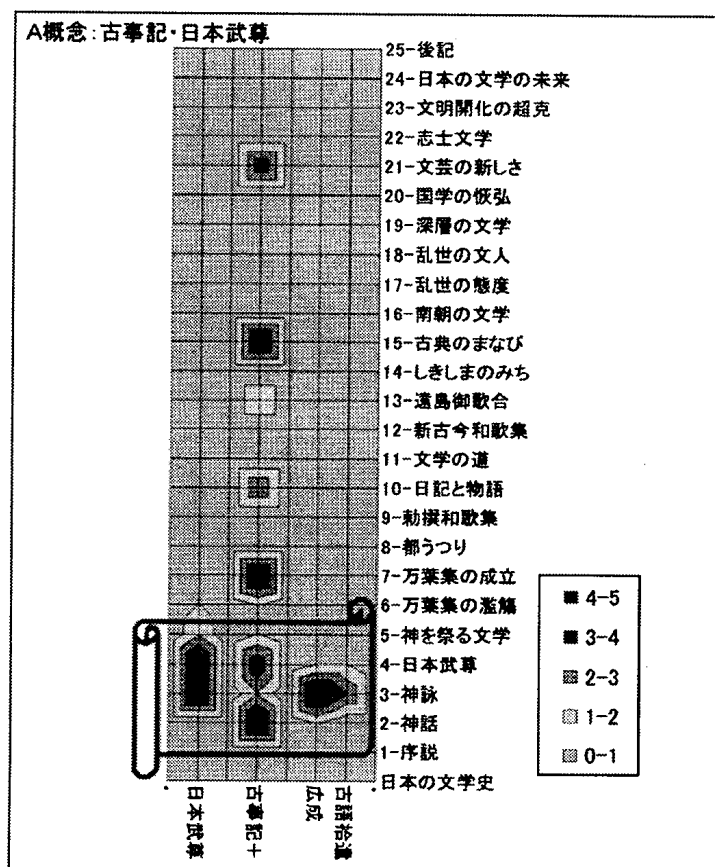
付図3 KT 2システムのKTCrossによるクロス表作成

調査する用語を画面左に置く。貞徳、芭蕉、・・・がそれである。隣のオプション欄で用語頻度（加算）、対象を文、測定を段落単位としている。画面右上部の（2）X表作成を押すと、クロス表ができる。画面右は蕪村と契沖とが頻度1で段落共起している21章1節1段のテキストを見せている。

付録（Ⅲ） 保田與重郎の文学概念

以下に、地図によって得られたA～FおよびF概念追補をテキスト原文に基づき絵解きする。引用文は『日本の文学史』（新潮社、昭和47年版）から新字に変え旧かなをそのまま用い、他の資料は原則として講談社『保田與重郎全集（全45巻）』から原文のまま旧字旧かなでとった。文中の下線はすべて谷口が記した。各地図の区切りは1とし、最大を5としたのでそれ以上の頻度はクラス[4-5]に含まれている。またA概念の「広成」と「古語拾遺」に見られるように用語を一体表示させた部分もある。

A概念：古事記・日本武尊



地図に現れたA概念の絵解き

A概念を地図の2章「神話」、3章「神詠」、4章「日本武尊」に焦点を合わせた。参考として斎部広成および同著『古語拾遺』をあげた。

万葉集以前の時代に古事記が頻出するのは自明である。しかし保田の場合4章に「日本武尊」と章立てしたように、日本武尊を文学として述べている。このことから保田與重郎の特異な神話・文学観が推測できる。

◎日本武尊と古事記十

保田が日本武尊をどのよう

に日本文学の始めとしてとらえたかをいくつか当たってみる。

(1) 日本武尊は記紀にある。しかし保田に日本書紀が現れないのは、次に示すように、記紀の違いを述べたところから分明となる。

十章四節二段 (抄)

～私は紫式部がよく学んだのは古事記だつたと思つてゐる。古事記のうち、人の世となつてからの記述は、代々のみかどの恋の御物語でその歴史を描いてゐるのである。このあざやかな事実に私は感銘してゐる。日本書紀の考へ方とくらべると、かういふ点では、本質的なものにふれるほどのちがひがある。

この引用から、保田は文学として『古事記』に重みを置き、書紀はからごころとして遠ざけていることがわかる。

(2) 保田は少年期から日本武尊を憧憬してきた。

三章二節三段 (抄)

～日本武尊のこの絶句の詩^{*A1}には、神と人が分れてゆく、時間のおごそかな移りが、人生永劫の寂寥の哀愁によつて彩られてゐる。皇子がこの旅の終り、都に到りつくまぎには、旅の宿りでなくなられる臨終の御歌、

嬢子の^{ヲトメ} 床の^{トコ} 辺に
吾^アが置^オきし つるぎの^{タチ} 大刀
その大刀はや

この歌はまことに美しくかなしい。この歌一つで、後々の日本文学の全部に匹敵するとまで年少のころから私は思つた。一つとすべてをかへてもよい。またはすべてを失つてもこの一つでよい、さういふ激情は年少のころである。これを口誦んでみると、わが世もさきもないやうな心持だつた。～旅路の臨終に、少女の床の辺の剣を歌はれたのが、少年の私に無我の感動だつた。少年の私は、この皇子こそ日本文学史上第一の詩人と心に銘じた。

(3) 保田は三十歳のころ、日本武尊を人としての日本文学史の第一においた。

四章一節七段 (抄)

私が人の世に於ける文学の第一章に日本武尊を拝したことは、通常の文学史の見地としてではなかつた。それは神の天造の詩歌でなく、人が今世今生に思ふ述志に即した文芸の世界のものとしてである。三十余年の前、私は日本武尊の御事蹟と詩歌についての感動をしるした^{*A2}。日本の文学と文人の志の系譜を明らめる思ひからだつた。皇子^{ミコ}の詩歌は神ながら神のことばでも、神の歌でもなかつた。～

* A 1 皇子の身がはりに入水した弟橘姫命を嘆いた「吾（ア）妻はや」

* A 2 昭和十三年東京堂刊の『戴冠詩人の御一人者』（保田満30歳）

(4) 保田は、日本武尊の英雄にして詩人の敗北を、日本文学史に通底する浪漫主義とした。

四章一節十一段（抄）

～年少にして絶大な強敵を数々次々に打負かし、忽ちに天下国中を風靡し、しかも何の現世栄達の代償もなく、早くいたましい敗亡に身を置くといふことは、わが国の英雄の一つの系列である。これは詩人に通ふ天命のやうにも思へる。時代が下つた武士の世になれば、義仲、義経、あるひは顕家、正行、みな美しい青年にして天下を風靡し、その風靡したことも知らず、何一つ現世の利得を思ふことなく、得ることなく、天が下を風靡することはそのまま疾風迅雷の敗北につながつてゐる。

わが国の民衆はさういふ年わかい英雄の生涯を詩として憧憬したのである。この浪漫主義と理想観は間違つてゐない、それは国の民の歴史が証してゐる。しかし史上の文武の英雄の中にも、皇子ほどの「詩人」は一人もあなかつたのである。

以上のような考えのもとに、保田は日本武尊の生涯を古事記の内で、なお「人」としての英雄と詩人観とによって最初の文学とした。保田はなぜ日本武尊の生涯をこれほどまでに光輝あるものとしてとらえたのか。

◎同殿共床、神皇分離、神人分離

保田の日本の文学とは、少年時に知った日本武尊の詩と行為に始まっている。以後保田の文学は皇子に象徴される「英雄でありながら敗れた者のための文学」という色合いを持ち、一貫している。保田はこれを神と人とが別れた悲劇としてとらえ、神話や神詠の上で齋部広成『古語拾遺』を引き、同殿共床^{*A3}、神皇分離、神人分離の考えを記していく。日本の神話では、最初神と人とは同居していたが、歴史の中で徐々に人が神々とは別のものとして分離していったという考えである。そこに、人が神々と引き離されていく過程にあつて、さまざまな悲劇が生じ、それが歌となり物語となり文学となった。

*A3 保田の「同殿共床」と書紀の「同床共殿」の異同について。この言葉は天照大神が天忍穗耳尊（あまのおしほみのみこと）にむけて「この鏡を私と申して大事にしまさい」と言った際のもの。書紀神代下第九段（一書第二）には「可與同床共殿 以為齋鏡」（岩波古典大系）とあり、広成も書紀の引用部分では「可与同床共殿 以為齋鏡」（岩波文庫『古語拾遺』西宮一民校注）と、同床共殿の文字をあてている。しかし広成は、神武が橿原宮をたて齋蔵（いみくら）に神宝を納めその管理長官として齋部家がなつたという所では「同殿共床」をあてている。保田は神武に関わる広成の言葉としてこの部分から「同殿共床」を引いていると推測できる。

- (1) 保田は日本の神話では、神と人とが最初は親子であったと説く。

三章四節一段 (抄)

～わが日本の神話では、神々と人々とは、肉親の血のつながる親子として、人は神から直接に生れた子である。～草も木も生物も、国土山河も人も、同じ神を親とする子どもだつた。すでに日神生誕の前に、地上に青人草を生みふやすといふ諾神の神話が、黄泉の大神に対し、宣べられた。神と人がいつか分れるだらうといふことは、原始から漠然と知られてゐた。～

- (2) 同殿共床と幽契による天照皇大神の分離について。

三章四節三段 (抄)

国の初めのころは、まだ神と人とのけぢめがあまり明瞭でなかつたのである。
スメラミコト、アマテラスススメオホカミ
 天皇は天照皇大神と、同じ殿、同じ床に住まはれてゐた。これを同殿共床といふことばでことの伝へを残しておかれたのが、広成の宿禰である。しかし神と人を分つといふことは、今生をゆき貫く便法として、人為を以て考へられたのでなく、すでに皇孫が天降されるさきに、天上で神の「幽契」としてあつた。たまたまその時がきたしるしは、シキ磯城のミツガキ瑞垣の朝に至り同殿共床がすでに安からずなつてをられた。～

- (3) 笠縫邑と豊鍬入姫命の齋いについて。

三章四節四段 (抄)

瑞垣宮の御時、宮中を出て最初におちつかれた場所が、大和のカサヌヒ笠縫のムラ邑だつた。ここにシキ磯城のヒモロギ神籬を立て、天照皇大神と草薙剣を遷し奉り、ヒメミコトヨスキイリヒメ皇女豊鍬入姫命が齋ひ奉らる。～

- (4) 崇神天皇と神皇分離、景行天皇皇子日本武尊。

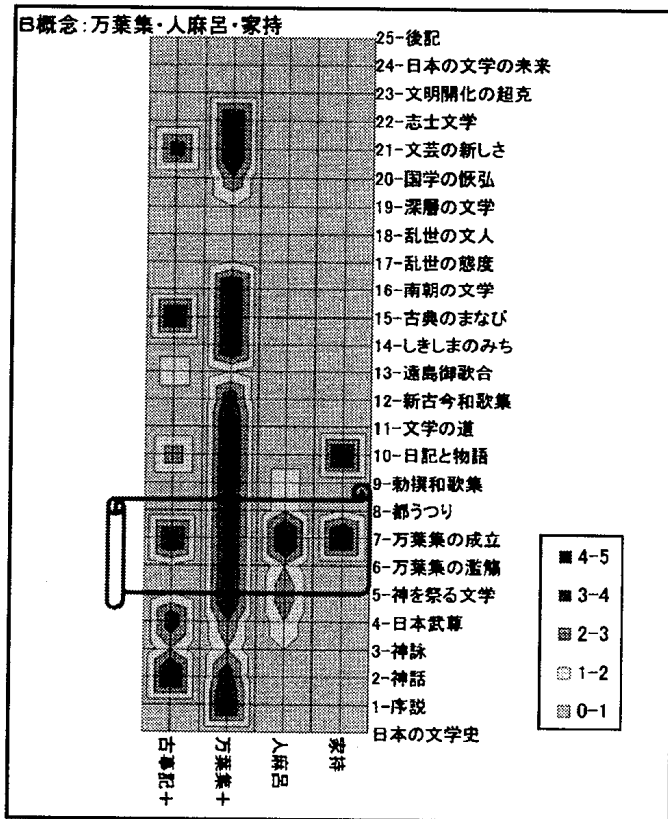
三章四節七段

崇神天皇の朝に至つて、ここではつきり神皇分離が、天上の幽契のままに実現せられた。この大事実が日本武尊の悲劇に象徴され、皇子の詩歌に現はれるのである。即ち日本文学は皇子の御名によつて、最も高い頂上に立つたのである。遠い太古の山河の中にである。

A 概念のまとめ

保田與重郎は上代文学に関して、日本武尊の生涯を歌・物語としてとらえ、そこに武を司る「詩人」をみた。尊の悲劇を神と人との分離にあるとし、齋部広成『古語拾遺』をもととして同殿共床、神人分離の経緯を説いている。

B 概念：万葉集・人麻呂・家持



地図に現れたB概念の絵解き

B 概念を地図の7章「万葉集の成立」に焦点を合わせた。参考として古事記との共起をみた。万葉集に深く関わることとして柿本人麻呂および大伴家持が共起するのは自明である。しかし保田の文学史では、ここに古事記も現れている。

◎万葉集と保田與重郎

保田の業績中、万葉集にかかわるものは多い。年譜^{*B1}によれば保田数え七十歳の九月（昭和54年：1979）に「わが萬葉

集」を五十回の連載で完了している。雑誌「日本及日本人」にその序を記したのは数え六十二歳の七月（昭和46年：1971）であった。これは終焉の、数え七十二歳十月四日（昭和56年：1981）までには上梓されず、翌昭和五十七年十月（1982）に新潮社から『わが萬葉集』として刊行された。すなわち、保田最後^{*B2}の作品とってよく、晩年の九年間保田は万葉集に執心した。

万葉集に関わる著書はいくつもあるが、戦前の大著として数え三十三歳に上梓した『萬葉集の精神』（筑摩書房、昭和十七年六月：1942）がある。『日本の橋』、『戴冠詩人の御一人者』、『後鳥羽院』、『和泉式部私抄』などの名著はすべてこれ以前のものであり、その後の昭和十八年十月『芭蕉』（1943）までのい

* B 1 全集別巻五（講談社、平成元年九月）

* B 2 別途に『日本史新論』（新潮社、昭和五十九年十月）があるが、これは全集三十七巻の解題によれば、執筆が昭和三十六年になされたもので、没後に奥西保が保田書庫から発見したものである。

くつかは、『萬葉集の精神』に比べると小品集の趣がある。つまり、戦前の業績は『芭蕉』をのぞいて、万葉集ではほぼ完了していたという感を持つ。

本テキストにあっても、これまでの研究では重要語「万葉集」の出現は一般語「文学」に匹敵する高頻度^{*B3}であり、著者・作品名の中では最大頻度を持っていた。また、序説に現れた重要語にも含まれており、北畠親房について後鳥羽院と同列にある。すなわち、戦前から戦後にかけて「万葉集」は晩年にいたるまで、保田がもっとも考慮した作品であったといえる。

◎「序説」に見る万葉集

保田は序説で、万葉集と王朝文学との間に断絶があるのではなくて、すでに万葉集の時代に源氏物語の文学を生む素地があったと記している。

一章一節五段～六段（抄）

～この奈良京の時代には、外国の文芸や思想も我国へ入ってきた。日本人はさういふものも尊敬し、書籍のために図書館をつくり、又教のために寺をたてた、しかもその反面では、のちの源氏物語のやうな文学を、殆ど予見したと思へる文芸も、すでに出てゐた。つまり「源氏物語」はもうあつたのである。

このことは「万葉調」といふやうな固定観念をたてた人々にはわかつてゐない。明治大正昭和となつてもまだわからなかつた。私は中学生の時代に万葉集をよむ時、土佐の鹿持雅澄翁の「万葉集古義」に学んだので、万葉集と王朝文学が一つだつたところをまづ教はつたのは全く幸ひだつた。～

保田は家持に近代人を見ており、万葉集を素朴単純と見る傾向に強く反発していた。

◎柿本人麻呂

人麻呂の壬申の乱に関わる長歌の具体例は「高市皇子尊、城上殯宮之時。柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌」をさす。人麻呂のこの長歌は壬申の乱をイメージ豊に歌い上げたもので、集中最大の長さをもつ。保田は『萬葉集の精神』でこの長歌に深い配慮をみせている。かけまくもゆゆしきかも、言はまくもあやにかしこき、ではじまる歌は丁度中間に、度会の齋宮ゆ神風に伊吹き惑わし、とある。これに関する保田の解釈は優れてしかし難解である。だが本テキスト

*B3 谷口敏夫「日本語文章における重要語の出現位置に関する分析」光華女子大学研究紀要、36号、1998

では、そこへの言及はなかった。

七章三節四段（抄）

～近江京の没落は、かつてあつたどんな危機より畏怖すべき大事件だつたのである。日本書紀編修の大眼目の一つと考へてもよいほどである。しかし書紀のあの壮大な文章をよんで、人がどれ程の安心をもつだらうか。万葉集成立の第一の眼目の一つにやはり壬申の乱への態度を考へねばならぬ。～

◎大伴家持

(1) 保田は家持の万葉集編纂態度を歴史的とする。

七章二節二段～三段（抄）

～その部立も、編纂方針の細心さも、尋常のものではない。何を思つて、このやうに諸国民庶のうたから、各地の伝説伝承の歌謡の類、さらに防人関係の歌の数々まで集められたのであらうか。ただ家持卿といふ人が、おそるべき人、不世出の偉人だつたと思ふばかりである。単なる文芸的な趣味濃厚の読書人の手すさびといふやうな、軽薄な理解法では真意がわからない。家持は無双の志の人だつたのである。～

この集の部立から編纂方法といふものを見ると、一つの変革期に対応する人の志といふものが察知できるのである。それは皮相的に見れば政治的である。しかし実質実体には、何らの政治性が現はれてゐない。個々たる私の欲望や一党一派の思惑を以てされた仕事でないからである。従つて政治的といふよりは、歴史的といふよび名の方がふさはしいかもしれぬ。～

(2) 大伴家持は武門でありかつ氏の長であつた。

七章三節二段（抄）

大伴の家は、肇国以来の武の名門であつた。大陸の問題の直接現地に擔当した時代は久しく、日韓の關係に於ても、大陸の学芸の移入に當つても、その中心をなしてきた。近くは壬申の大なる功臣だつた。わが大倭朝廷の制度に、唐風の制度政治を移入する時、最もふさはしい一門だつたのに、唐風の風流生活は移入しつつ、制度政治の学芸家の養成は、藤原の淡海公の子弟にうばはれてゐるのも奇妙である。大伴の考へた理念や、学芸や、風雅は、政治といふ考への上でも、ここで全く二つの異質だつたのである。表面上ではその家門衰退したやうに見えるが、国の文芸といふ歴史の中では、その志は一貫した。～

◎万葉集と古事記

(1) B概念でも古事記が頻出するのは、万葉集の精神が神を祭ることにはじまり、古事記の生命原始の充満した世界まで覆っているからである。

七章一節二段（抄）

万葉集には、心うたれる数々の歌がある。しかし朝倉宮の御製とされる、開巻の歌からうける私の感情は、普通の感動や感銘といふよりも、もつと生理そのもののなまめく香気さへ、感じられる。人麻呂や黒人の作からうけるものにくらべて、次元は官能的なものかもしれない、家持の歌に味ふ志とも関係ないのかもしれない。しかしこの官能と生理には、生命の野性の欲望など何のかげりものこさぬやうな、神霊がきらきらと大空に充満した感じである。天地の初めなのだ。さうして私は、万葉集のつひの極みに、かういふ生命原始の充満した蕩々の空間を考へてゐるのである。しかし万葉集の表情には、深刻な歴史や悲劇や、それに対する人生や述志といふものが、充実してゐる。まことに強烈であつて、しかも美しい、壮烈である。

(2) 雄略天皇の歌とことばのしらべ。

七章一節三段～五段（抄）

オオハツセフカタクノスメラミコト
大泊瀬稚武天皇、雄略天皇と申上げた英雄の大君の御事蹟は、古事記にもしるされた説話が、まことによく出来てゐる。見事な文芸作品だ。日本書紀の方は、所謂史実を織り込む努力のためか、混濁がある。文芸としては品が下る。～

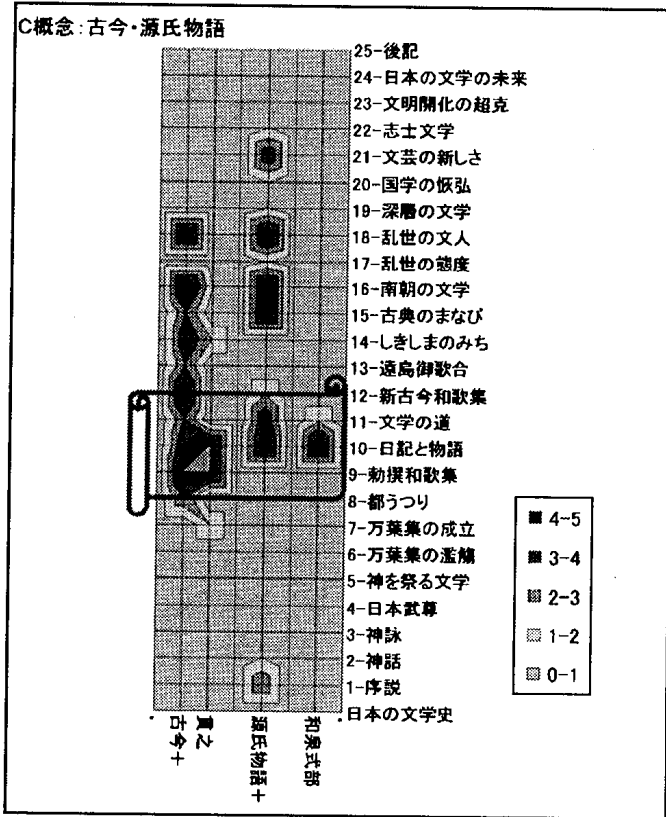
しかし私は「籠もよ、み籠持ち」と口誦むまでもなく、一種異常の感動の世界へ、我を忘れてとけ込んで了ふのは、古事記に描かれた稚武のすめらみことの英雄譚にひかれるからではない。～

この御製を万葉集ではハツセアサクラノミヤニ、アメノシタシロシメシシ、スメラミコトノミヨ、スメラミコトノミヨミマセルオホミウタとするした。このことばのしらべの悠久なとのひこそが万葉集のしらべの根底である。～

B 概念のまとめ

保田與重郎は万葉集を生涯にわたって研究したが、その中心は歌人として人麻呂、知的文化人として大伴家持を想定した。ここに古事記が色濃くでてくるのは万葉集が古事記の歴史を象ったことにある。その歴史の中で壬申の乱を深く見つめた人麻呂を仰ぎ、またそういう時代相全体を把握し万葉集を編纂した家持の慟哭と鬱屈に近代人をみた。すなわちB概念は保田の歴史観である。

C概念：古今・源氏物語



地図に現れたC概念の絵解き

C概念を地図の10章「日記と物語」と11章「文学の道」に焦点を合わせた。

また別に本編図1から、万葉集に共起のある9章「勅撰和歌集」をみると、保田の万葉集から古今集への捉え方も明らかになる。

古今和歌集は最初の勅撰集であり、紀貫之はその主要な撰者であった。古今和歌集仮名序は貫之のものであり、辛辣な歌論であると同時に名文と言われて

いる。万葉集が共起しているのは、次の九章引用から明白である。これは紀貫之の仮名序への保田の評価である。

九章四節二段

古今集の勅撰が、万葉集ののち表むきから衰へた和歌を、再び高揚するといふ志と自信から、気負つてなされたものだつたことが、前代の代表歌人に対するきびしい批評となり、それがこのものものしい歴史的な序文の中に書き入れられた理由だが、このはげしいものは、自身にも、時代にも、さらに後代にも課したものだつた。これが文章の格調を無上のものとした原因である。その志は大胆で、悠久の国柄に即してゐたのである。

◎平安王朝サロン

10章「日記と物語」は本編図1から重要語のうち、万葉集+、家持、貫之、源氏物語+、和泉式部、松永貞徳+と6事項間の共起がある。多数の重要語から成り立つ10章は、それだけ密度が高い。この10章で万葉集や家持が共起す

るのは、保田によると、家持のサロンが後代の王朝文学、女房文学の基礎となったという考えからである。また「日記と物語」というテーマでは紀貫之（土佐日記）、紫式部日記、和泉式部日記、源氏物語などが頻りに論評される。理由がわかりにくい松永貞徳の共起については以下の引用が参考になる。引用中の玖山公とは源氏物語研究の権威、九条^{たねみち}植通をさす。

十章三節三段（抄）

「戴恩記」に貞徳が書いてある、貞徳が玖山公に源氏物語を学びにゆく時の話は、公が貞徳に、一度読んで御覧なさいと申される、貞徳はいぶかしく思つたが、云はれるままに源氏の一節をよみあげると、すなほに読むと存ずれど、そなたのはみな訛りですと御笑あり、自身でよまれた。これをきいて貞徳は始めて、源氏物語が何であるかといふことがわかつた。この話はおしなべて日本文学の肝心をさすものとして、私は年久しく思つてきた。～

(1) 保田は平安朝の文学が生まれた土壌を道長の世界にみ、紀貫之や源氏物語を同じ文脈の中で語っている。

十章三節二段（抄）

此の世をばわが世とぞ思ふと歌つた道長の気持は、わが私の満足だつたことにはちがひない。しかしただの僭上とか傲慢といふのも、当らぬことと思へる。位人臣の栄を極めたといふことにしても、あの血統あの家筋に生れた人の場合、並の権勢栄達の欲望で判断すべきでないと思はれる。～貫之が、鳥けだものの類に向つて、貫之と同じ日にこの世に生をうけたことを喜べといつてゐるのは、悠久なものへの感謝の念が言外にととのつてゐる。～物語はただの女ことばの美しさである、うけ答が平行して、諾否を求めず、諾否を認めずといつた、ことばの眞実世界である。その無内容に驚くべき文明の歴史が藏され、深い人情の秘奥がうつされてゐる。しかもかういふ小説以上にもつと重大な問題は、人と人との間で、ことがらを通じるのでなく、こころを通じさせるこのことばといふもののもつ、いのちや魂、はた又そのみやび、さらにそれが産み出す永劫の力、未来にまでわたる創造力の世界が現前するよろこびである。美しい極楽の風景は、絵画に始り、自然界で一応極るだらう。人間の言葉といふ、天造と人工をかねて極致ともなる美的世界をつくるそのものが、最も美しくうごき出すところをめざして、王朝の文学の求めたところがあつた。～

(2) 道長は大空をわたる月のような存在だったと保田は言う。

十章三節五段（抄）

道長の政治的経歴を見ると、多少人と異つたところで、私はこの人に傲慢を嫌悪

する感はうけない。当時世界第一の大都の最高位の権力者だつた。日本の史上最も円熟した時代だつた。紫式部、清少納言、和泉式部を始めとし、名を忘れたやうな女流の歌人の一人でも、他の時代におけば、当代の明星とも称へられるやうな幾千百の女性の中央で、道長は大空をわたる月のやうな存在だつた。この文明の史実だけは誰も否定出来ない。～

(3) 保田は物語文学を浄土の中でもみていた。次の引用のうち「飛行の天女」とは、おそらく宇治平等院鳳凰堂の雲中供養菩薩^{*C1}をさすと考えられる。

十章四節三段（抄）

～道長が宮廷に構成しようとし、又殆ど人間の歴史の最高の文明の濃度で現出したその浄土は、神の如き天子の周圍に、稀代の天才詩人だつた美女たちを、歌舞の菩薩の如くに配置した。彼女たちはみなさまざまな飛行の天女たちだつた。その飛行の趣きをうつすだけで、中期のある形式の物語文学は成立したのである。

◎保田與重郎と王朝文学

平安王朝文学として保田が一本をたてたのには『和泉式部私抄』^{*C2}がある。実際に執筆していた時期は昭和十年代初期であるが、刊行されたのは昭和十七年であった。戦時色深まる時代にあつて、硬直し教条的な文化体制への激しい嫌悪があつたとおもわれる。同書は文学として一級である。これは当時も戦後も多くの人たちから称揚をうけた作品として残る。

十章四節八段（抄）

私は文芸の批評家として王朝文学を尊重した。貫之の盛名に重大な理由のあつたことを再認しようとした。王朝文学といへば、古今源氏を奉じるのは当然である。しかし昭和の初めごろには、王朝文学を重んじたり、本居宣長翁の学問を批評の方法と考へてゐるやうな氣風は、わが国文芸界に無いに近かつた。さう思つたから、私はおのれの立場を明らかにすることに、熱情をわかすことが出来た。和泉式部と孝標女についての若い私の評論も、黙つてをれば誰も何もしてくれない、これが大切な事なのに、さういふ氣持を氣負ふ程にもつて著述したものである。～

◎源氏物語

(1) 保田は戦後京都に住み、右京区鳴滝が終焉の地となつた。大和桜井に生をうけ東京に遊学し、文筆をなし、平安朝文学の故地に歸つた。

* C 1 保田には「雲中供養佛」『戴冠詩人の御一人者』（昭和13年。全集5巻収載）がある。

* C 2 全集14巻所載

十一章一節一段

平安朝文学の終末期に入ることの事を考へながら、私の想念の上では、万葉集、古今集、源氏、清少納言とならんでくる。源氏のやうな作品がどうして出現したかを思ふと、ただ一言の驚異である、今でさへ心が遠くなるやうな感がする。それについて、今さら何をいつてみても、そらぞらしいやうな感じである。三日もつづいた雨あがりの京の山は清々しい、若葉は美しい。これがみな源氏や枕草子の現地なのだと思ふと、浮世を離れたやうな、しかもこれをしも今生の思ひといふやうな実感がひしひしとする。～

(2) 保田は源氏物語に現代小説的な結構や言語の伝達方式をみているのではなく、源氏物語を一つの世界として味わっている。源氏物語には何もかかれていないという断言は、源氏物語が空間を、上代につながる玄妙な空間をつくっていて、その中に住まいしいその中で息をせねばわからぬと言っているようである。しかしまた、世間での源氏理解にかかわらず、源氏物語がそういう世界を作ったというところに、保田は贅辞を記している。

十一章一節二段～四段（抄）

源氏物語はただ不思議な文学である。この上なくやさしく、嫺々としてゐるのに、ふと思ふと、全くふてぶてしい。こんな大きい作品を、その日の一人の女性が生んだといふことが、世の常でないことの証のやうに思ふ。～そこには何もかかれてゐない。小説など少しも描かれてゐない。～

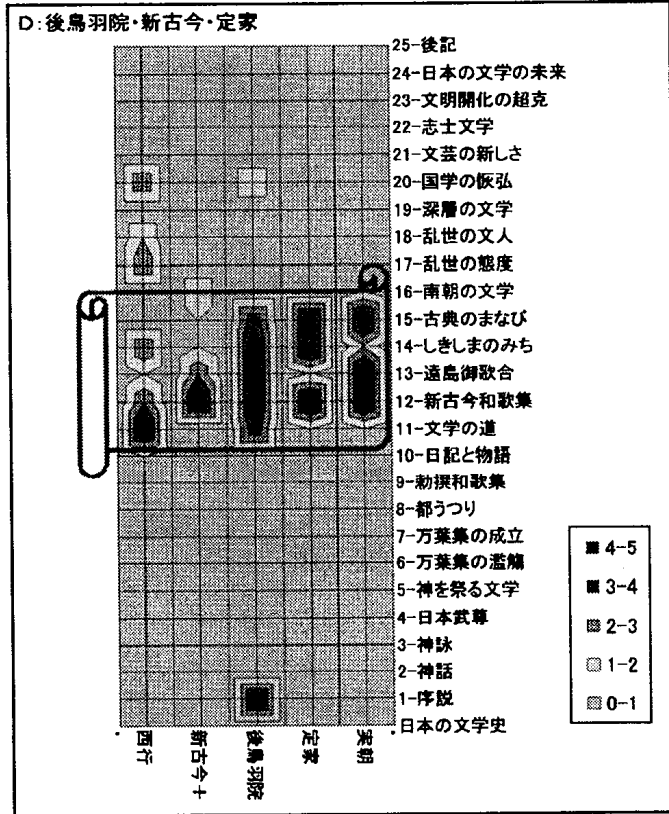
しかし儒仏二道からなされてきた源氏の解釈のはてに、本居宣長が、全く素直にそのあり方を説かれた。旧来雑多のイデオロギーで解釈されてきたものを排して、もののあはれといふ意味から説かれたのは、古ごとの自然にかへされたのである。自然とは、日本の本来のことばでは、かむながらといふ。これが人道の根源である。人はみな美しい眉目をもち、そのことばはすべて声明のやうな音楽であつた。～

不思議な驚くべきものが生れた事実を、私はかみしめて納得してゐた。書物の上でよめば、源氏にも拙いところもあつて、あるひは清少納言の方が、一様に爽かにおもへるのも、その書籍の上を離れて想念すると、源氏は一ぺんに大きくひろがつてしまふ。それは巨大といつてもよいが、岩のやうな重さのあるものでなく、空気の広大さだ。われらの遠御祖たちの思つた、天空に充満する靈気のもの、かの「高天原に神鎮る」ものといふ表現は、いはば空気のやうな、もつと無な大気のやうなものだが、さういふありさまを大きく描き写した文学がわれらの歴史の上に一つだけあつた。これは観念からいつてゐるのでない、この作品のあるといふ状態を思つてゐるのである。

C 概念のまとめ

保田與重郎は古今和歌集仮名序に重きを置き、そこに万葉集から古今源氏への接点を見ている。源氏物語に大きな空間を味わうところに、保田の古典文学観がある。

D概念：後鳥羽院・新古今・定家



地図に現れたD概念の絵解き

D概念を地図の11章～15章に焦点を合わせた。

後鳥羽院は序説に現れている。本編表1「序説に現れた重要語」でわかるように後鳥羽院は北畠親房（頻度8）につき、万葉集（頻度5）と同数の頻度を見せている。すなわち本テキストでの後鳥羽院に対する保田の関心は非常に高い。保田には著書『後鳥羽院』があり、そこから「後鳥羽院以後隠遁詩人の系譜」と

いう考え方が導かれ、保田の日本文学史を貫くこととなった。これはF概念追補で論究した。

◎後鳥羽院

保田は日本文学を中世の後鳥羽院時代でわけている。古事記・万葉集から古今・源氏をたどり、後鳥羽院の新古今および隠岐での崩御までを連続した日本文学とし、それ以降は地下に日本文学の精神が伝わったという考えである。そういう地下の精神を再興したのが近世の芭蕉である。

一章二節十一段（抄）

～私は日本の文学史では、近世を旨として、文人の志の系譜をたどりたい。「日本文学」といふべきものは、後鳥羽院まで、さういふ日本文学が、どういふ形で国の人々の心に生き、国の人々のところを生かしたかといふ、二つの事理のやうな、しかも大本は一つのやうな、そんな文学史を私はかいてみたいと思つた。

保田の後鳥羽院への執心は、後鳥羽院がただ優れた帝王として時の武断専権

に立ち向い隠岐に流されたというだけでは、それほどの関心はなかったと考える。保田は不思議なほど後醍醐天皇への言及が寡少^{*D1}である。なによりも、後鳥羽院は日本の文学史上忘れてはならない勅撰集、新古今和歌集を下命し、その実質的で中心的な編纂者でもあったという事実が大きい。現代においても、後鳥羽院は「天才歌人^{*D2}」という評価を受けており、増鏡に表された生涯の物語と重ね合わせるなら、保田が若き日に文学史を二分するその中心に後鳥羽院をおいたわけも、納得できるところがある。

◎新古今和歌集

保田は危機と終末観の新古今に軽みをみる。これは芭蕉に通じる。

十二章四節一段～二段（抄）

新古今集は御自撰の勅撰だつた。～歌品は優艶典雅、しめやかな眺めに、どことなく沈潜の気合がある。時世に合わせてよむからであらうか。～「承久兵乱記」が奇しくもしたやうに、「せうきう三ねんあきにこそ、もののあはれをとどめけれ」といふ気分は、すでに新古今集にあつて、政体移動といつたこと以上に、もつと深刻な文明の歴史と、それに対処する志とを象徴するやうな文言である。即ちこの日より、日本文学の本体はおどろの下や地下水の流れとなつた。～神を信ずる人の楽しみと軽みを加味して、精神の国、美の国を、神のまにまに樹立する方法さへそのうちに知つた。～

釈阿は日常よりも歌風に淡く、西行の生成の理は、歌にあらはれて花散る風情がある。～古の無名の吟遊詩人にはさういふ例に当るもの多く、さういふ人々の唇のうへの歌が、古典の相当部分を構成するのである。道化師、遁世もの、宴曲謡曲をなした乞食の徒たち、かういふくらしには、貧しく賤しくとも、なつかしい自然が必ずあつたものだ。軽いといへば悪いことばとなるが、軽みといへば尊い風格を表はすことばである。さういふ軽みは、危機と終末観の渦の中におかれた新古今文壇の一つの色彩をなしてある。

*D1 テキストでの後鳥羽院の頻度は55、後醍醐天皇は10である。頻度の差には意味があると考ええる。

*D2 現代の優れた歌人であり評論家の塚本邦雄は『新古今集新論』（岩波書店、1995）で、新古今の入選歌として後鳥羽院は三十首（最高は西行の九十四首）だが、「後鳥羽院の歌なら、百以上は秀作があります。なんだったら私が百首選んであげましようかと言いたいくらいです。しかもそれを後ろ指指す人も、笑う人も絶対にはいはずです。さすがに後鳥羽院の歌は百首入っていても、屑歌はないなあとは言うでしょう。」という。塚本の同書での後鳥羽院に関する論評はかろみの中に重厚さがある。塚本は後鳥羽院の生涯を現代小説として『菊帝悲歌』（集英社、1978）に著しており、これは言葉をつくせぬほどの名著である。

◎藤原定家

(1) 保田が後鳥羽院を称揚するのは当然としても、後鳥羽院とは資質が異なった定家に対しても十全に評価している。それは決して次点としてではない。後鳥羽院が異質であったということであろう。

十四章一節一段 (抄)

～定家の名が神聖視されたことについては、またいろいろの理由がある。二条家、京極、冷泉と別れうけつがれた歌道の家元の思惑操作ではなかつた。日本の文学史の上で、定家は偉大な存在だつた。いろいろのことを沢山に、丁寧に考へた人であつた。後鳥羽上皇のやうな、梯子のかけやうのない大精神の存在が、定家を少しあわただしくしたのであらう。歌や故実の学びといふことは、いまの世の人の考へるやうな、術学の技でも、研究と称する無目的な努力でもなかつた。～後鳥羽院の場合より、もつと常識的なところで、整理するといふことを知り、それを知つてゐるといふ意味で実現したのが定家の営みだつた。このけぢめを私は大切にしたい。後鳥羽院が定家を、俊成西行や家隆などにくらべて、うちとけ難いところで批評されたのは、このけぢめを考へると、当然のやうに思はれるのである。定家は後鳥羽院のやうな「詩人」ではなかつた。

(2) 保田は定家に常人の志をみている。

十四章一節二段 (抄)

定家が考へた歌学は悠久なものに対する常人の志だつた。多くの古典の校訂本をつくられたことも、同じ大きい志の現はれだつた。その間に国語を正しくすることが如何に大切なことかといふことを、身にしみて知る条件環境も経験した。戦国末期に国語が大きく紊れたころと、殆ど同じ状態が、院政末期から起つてゐたのである。地方の豪族の上京につれて起る当然の現象だつた。～

(3) 保田は定家の古典校訂など地道な仕事を高く評価する。

十四章一節三段 (抄)

定家の志は、日本の文学の上にあつた。これを風雅^{ミヤビ}といへば、即ちすめ神のみちであり、それは朝廷の風儀として現はれる。平安の女流の文学者の作品を校訂し、写本して伝へるとき、仮名字の遣ひ方を定める必要を悟つた。後の時代に対し、国と民に対する、末代の思ひだつた。悠久な志のあらはれである。～合理的と見える方法で整理し、その成果を伝へられた。～日本の文学の歴史の上で、大事な時に出て、その時の必要とする大事を、殆ど十分に近くなしとげた人だつた。この定家が実朝に教へたことの一つは、万葉集を与えたことだつた。

◎源実朝

本編図1によれば実朝は15章「古典のまなび」で古事記、万葉集と共起する。

15章の内容は鎌倉時代の古典学問や有職故実について書かれている。古事記、万葉集は当時の学問としての古典である。武家の棟梁、鎌倉幕府三代将軍源実朝がここに共起するのは、以下の引用によって明白である。

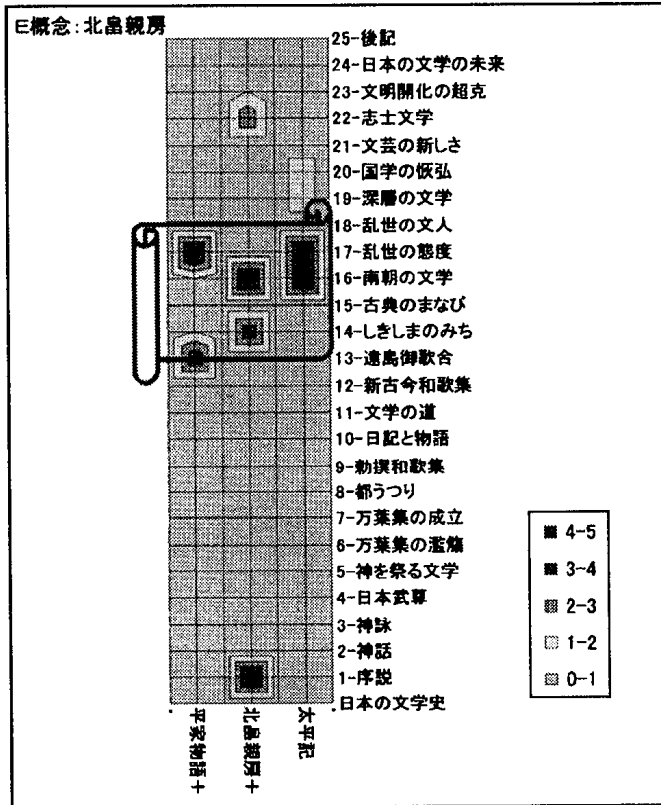
十五章一節二段（抄）

～実朝が万葉調の歌をつくつたのは、佐佐木信綱の調べでは、定家から万葉集を与えられる以前からだつたといはれてゐる。実朝は勅撰集などで見た万葉のうたから、あの一種の「万葉調」をよみとつたやうである。実朝は正に天才であつた。鎌倉で仙覚が万葉集の二十巻本を校訂し、新点をつけたのは、将軍頼経の命によつたもので、頼経は実朝薨去のあと、源家大將軍の縁籍のゆゑを以て、迎へられて鎌倉の主となつた。この時二歳の幼児だつた。～

D 概念のまとめ

D概念は保田の和歌観である。しきしまの道を新古今和歌集の編纂者後鳥羽院の生涯にみている。しかし常ならぬ後鳥羽院の資質とあわせて、和歌や古典の整理編纂に限りない貢献をはたした定家もおなじく評価する。保田は、定家が実朝に万葉集をあずけたことに文明の秘やかな伝搬をみているようである。

E 概念：北島親房



地図に現れたE概念の絵解き

E概念地図を16章「南朝の文学」に焦点を合わせた。

保田は戦前と戦後と晩年にかけて考え方に変動が少なかった。文学史上に言われる「転向」という現象からもまぬがれていた思想家であった。ごく初期の青年時にドイツロマン派文学に親しみ、その後日本の古典に傾注したことを転向と考える向きもあるが、幼少から少年期にいたる郷里の生活によって得た自然な教

養が最初にあって、大阪、東京帝国大学への遊学という自由な環境で、知的な異境の文物に親しんだと考えるのが自然である。

◎保田與重郎と北島親房

そのような変動の少ない文学思索の人生で、比較的大きな変化が一つあり、それが「北島親房」『神皇正統記』にたいする評価であった。たとえば昭和十八年刊行の『皇臣傳』には「楠正成」が納められており、この中に盛んに北島親房への言及がある。この時代、大東亜戦争中の思想世界が国粹主義的な過激さに彩られていたであろうことは容易に想像できるが、保田は世間の情勢論として称揚されていた『神皇正統記』に少なからぬ批判をあげせている。これは、イロニーというよりも、まともに神皇正統記を読めば現代でもわかることである。親房はあまりに自分の立場の堅持や勝つための思想戦、戦術に引きずられ、歴史の公平さから離れた面^{*E 1}があった。

「楠正成」『皇臣傳』（全集17、p318）

親房が建武の時の武臣のことを論評し、「武士たる輩、いへば數代の朝敵なり、御方にまゐりて其家を失はぬこそあまりある皇恩なれ」と堂々の立論をしつゝ、轉じて「天の功をぬすみて己が功と思ひ」と云うたところは、卿自身の地位とその世俗的責任と、竝びにこれが新帝御施政の御参考となすべく著した著述だといふ、二つの重大な原因があつたが、そのいづれから考へても、心惜しいかきぶりである。

何故天の功といふ如き曖昧な、軽い、一言にいへば國際的表現をしたのか。親房の言論は草莽の論でなくして、つねに身分を反省し、世の太平の日の爲政家の美德とすべき人間性の弱點に破れた考へ方に立脚したからであらう。惜しむらくはわが國の神人の思想に遠かつたのである。かういふ論法をさして古人は漢意からごころと呼んだのである。

親房のもつてゐた儒意よりきた道德論や修身論の影響は、抽象的な人間的反省を生み出し、忠實の批判に於てそれがさかんにあらはれてゐる。私はそれをくりひらきつゝ、つねに當代にこれと竝んで草莽の論理のなかつたといふ事實に腸を断つのである。

保田は在野精神を貴び、それは地下じげとか草莽そうもうという言葉で表される。庶民という言葉に近い。楠正成は源氏とも平氏ともゆかりがあるわけでもない、まして当時の鎌倉幕府とは敵対するような土豪であつた。これを悪党と言ひ習わしてきた。それは高位高官ではなく、無冠の草莽そうもうの武士であつた。このような正成を親房が容認することはなかつた。保田によれば、それは親房がわが國の歴史を叙述しながらも、硬直した儒教的な漢意におちいり、草莽の志に思いをいたさなかつたからである、と論難しているわけである。

親房が無位無冠であつた楠正成やその子弟の楠一党に対する冷淡さは、かたくなまでのものがある。この背景には、自らが養育した後醍醐天皇皇子世良親王の早世とともに一旦は出家し、親房が建武親政に参加したのは全てが成つた後の時点であつたこと、これは大事なときに親房が出家していたという事実で

* E 1 岩佐正は戦後の日本古典文学大系『神皇正統記』（岩波書店、昭和四十年）の解説（p21）で、親房の長男、当時21歳の陸奥鎮守府大將軍顕家（あきいえ）が後醍醐天皇を痛罵した上奏文について次のように評価している。「顕家は上奏文において、苦楽を共にした東国武士に温い情を寄せ、なすなき公卿・僧侶等を痛罵しているが、親房の筆は武士に急にして、公卿にはふれることをさけた傾向がある。特に血・家の尊重の念は必要以上に中臣氏を推重し、現実の藤原摂関の人々が顕家の筆端にその無能・無策ぶりをとりあげられているにもかかわらず、親房はこの氏の歴史性の前に卑屈なほど頭をたれている。」

ある。その間もっとも活躍した^{もりよし}護良親王が楠正成とともに戦い、これは皇太子となるべき世良親王の後ろ盾であった親房の立場が消え、次の皇太子である護良親王の頼りにする者が楠正成となった事実。そうして後醍醐天皇が護良親王を足利に預けたこと、鎌倉への配流である。すなわち後醍醐天皇が護良親王を切り捨てたこと、これは護良派を一掃することが後醍醐の真意であることを親房が認めざるを得なくなったこと。このような歴史の背景からうかがうに、親房の筆致は情勢論につきり、後醍醐天皇のあと吉野を補佐する「忠義」の公卿であるにもかかわらず、南朝方の悪党を中心とした武人に対して冷淡であった。

このような態度を保田は、親房が草莽の志、すなわち楠一党がなぜ建武親政に参加しその後も南方であったかの、その在野精神をまったく理解していないし配慮もしていないと論難した。以上が、戦前の保田が北畠親房にもっていた考えであった。

しかし、戦後の本テキストでは微妙に変化した。

◎戦後の北畠親房

(1) テキストの序説には戦前と現在（昭和四十年代）とで北畠親房への考えが異なってきた事への言及がある。

一章二節三段（抄）

～以前私は親房卿の神皇正統記の思想を批評したことがあつた。又泪をこらへてその一節を幾度も誦したこともあつた。批評するといふことは何でもないことである。しかし巖に玉子といった西洋の哲人のことばが、こんな時の批評の相である。私は巖に玉子をぶちつけるのが好きでないが、幾度もした。そのことの結果は無意味かも知れぬが、そのこと自体には意味がある。私はそれを今も信じてゐる。～

(2) 『神皇正統記』は史実として、負け戦の戦場の中で記された事実がある。これは保田が終戦間近の昭和二十年三月に軍部からの懲罰的徴兵を受け中国に渡った時の状況に似ている。保田はこのとき数え三十六歳、瀕死の老兵であった。この年の一月には病床死に瀕し、なお『天杖記』の校正を急いでいる。

一章二節五段～六段（抄）

北畠の親房卿が「神皇正統記」を著されたのは、関東僻地の孤城で、四面みな敵の重囲下にあつた。ただ絶体絶命の敗滅がその運勢のやうに思はれた。出撃は狂者

のなすところ、逃走は愚者の計だつた。さういふ死を待つやうな絶対の場に当つて、親房卿は一部の史料ももたないで歴史の書を著述された。これがまことの歴史の書として、日本人がかつて著した無数の書籍の中でも、かけかへのない貴い文学であつたが、その志を思ふ時、同じ民族の一人として、私は耐へ難い感動にうたれる。私はそれに安心して玉子をうちつけてゐたのである。

その時の状態は、絶望といふものである。敗亡なすすべがない。さういふ時に當つて、道義と人倫を未来に恢弘するためになしうる唯一の方法を、親房卿は実践して教へられた。～

(3) 保田は親房の思索と経験から方法を学び、戦後を生きようとした。敗戦という怒濤の歴史の中に生きて、あらためて、歴史というものに思いをはせた。

一章二節九段 (抄)

私は「歴史」とは何であつたかを思ひ、ある時点で唯一のなすべきこと、なしうること、そしてなさねばならぬことを教へられた。なさねばならぬといふのは、私が文人だからかく申すのである。その次に私は方法を知らされた。自身の血に潜流する何ものかに、国と民の歴史を聞くすべである。わが内臓の中に象られた国土山河の地理と、血を形成する悠久の生命の歴史、さういふものを私は痛切に思ひ知らされた。真の歴史家は詩人でなければならぬ、真の歴史書は詩文学の最も壮烈の作品だ、こんな云ひ方は、少し気障で軽いが、大体云ひ得てゐるところがあると思はれる。

◎神皇正統記

保田は、『神皇正統記』を当時の親房の環境、人心の中であらためて見直そうとしている。三種の神器に正統を見る考えも蒙昧の結果ではなくて、人心と歴史の中でみるなら、その確固とした存在感は当時疑うべくもなく、真実であつたと論じる。

十六章二節一段

親房卿の神皇正統記を論じた人々は、その思想上当時の朱子学の大義名分説の類の影響があつたとした。三種神器の所在によつて、南朝正統を説かれたことから、観念的な、あるひは形式的な、時人の考へ方に即して、誤解偏狭とされたものがあつたかもしれぬ。この時代の神器に対する異常なまでの信仰は、むしろ人心の異常を示すに及んでゐたやうに思へる。鎌倉開府の後、東海道の交通の増加にともなひ、熱田宮の信仰が高まり、頼朝縁故の大宮司家の勢威もあつて、その信仰は武人から一般民庶に及んだ。平城天皇の御代、齋部広成卿は、熱田宮の祭祀のまつたからぬことを、国家政治上の欠典の大なるものと奏上しをられる。小楠公討死のあと、吉野行宮を攻めた高師直の軍勢が、神器御動座の流言に驚き怖れ、数万と称した勝誇

つた軍勢が、忽ち四散逃亡し、大将も亦狼狽して率先逃れ去つたといふやうな太平記の記事は、作者痛快の文飾でなくして、当代人心の真理、まさに歴史のその真実を十分に表現したものと思はれる。

◎神皇正統記の文章

保田は『神皇正統記』に、対象への愛情をたたえた文章の威厳をみ、それは紀貫之の古今集序や源氏物語に通うところがあると言う。

十六章二節三段（抄）

神皇正統記の文章は、その荘重さに於て、またその威厳に於て、かつてなかつた国文である。端正の調べは、咏嘆にも似た廣大無辺な愛情の思ひを底にたたへてゐる。文章の威厳は、神皇正統記に於て、わが国文として初めてあらはれたと言ふことは、決して誇張と思はない。貫之の仮名序、源氏物語、後世の芭蕉の文、かういふ系譜の上で、私は神皇正統記の文章を考へたい。古今序源氏物語の文章と、親房の文章の通ひを見定めるといふことは、私の文学史のよつて立つところである。～

◎太平記と親房

16章「南朝の文学」では、当然のように『太平記』との共起をみる。保田は太平記をどのような文脈でみているのか。『太平記』の時代はおわることのない乱世であった。乱極まった世相の中で、なお北畠親房は文武兼備の人、すなわち「歌」を忘れない人であったと保田はいう。

十六章二節五段～六段（抄）

～時代相では乱極つて、乱といふものが世と人の底にしづみ、倦みつつも、止むことなく、仕方もなく争闘をつづけてゐる。勝利は世の救とならない、敵味方供養といふすてばちの思想が出てくる時代だつた。太平記は乱世を叙述描写し、文学の願ひによつて泰平を将来しようとの思ひを、その書題にこめたものだと、何百年もの間の、古人となつたわが国の文人学者は信じてきたのである。

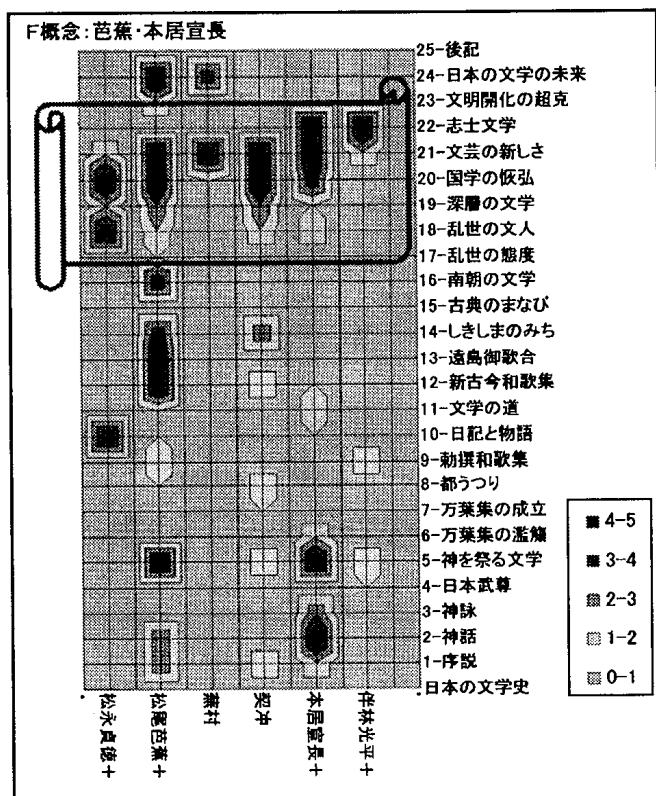
～親房卿は歌に於ても、多数の同じ時代の南朝の英雄たちのやうに、その名家の一人であつた。学殖無双、文武兼備のこのやうな偉人や、それにつづくに足る人々が多数あらはれて、しかも太平記の乱世は蜿蜒とつづくのである。

E 概念のまとめ

保田が北畠親房を戦前批判したのは、当時の国粹思想家が多分に『神皇正統記』を教条的に、同書をして文化施策の一翼を担わしたからであろうと推量する。戦後の保田は、親房がなぜ、どのような状態で同書をあらわしたのかにつ

いて、思索を自らの体験の中で深めたとき、親房を批判することの浅さを味わったのであろうか。

F 概念：芭蕉・本居宣長



地図に現れたF 概念の絵解き

F 概念を地図の20章「国学の恢弘」、21章「文芸の新しさ」に焦点を合わせた。しかし淵源は5章「神を祭る文学」にあった。

F 概念では6つの重要語をあげたが、中でも松尾芭蕉と本居宣長とに注目した。この両名は保田のテキストに終始言及され、いわゆる「文学」や「万葉集」に等しい高頻度用語である。

江戸時代、近世における他の松永貞徳、蕪村、契沖、光平と並べたとき、共起による群としてのなんらかの概念が顕著になる。これは「国学」という従来の考えでくくることもできるが、そこには荷田春満かだのあずまろや賀茂真淵あつたね、平田篤胤は頻出しない。保田の中で芭蕉と宣長とが強く共起するのは何故なのかという疑問がわいた。この芭蕉と宣長は三つの章で顕著な共起を見せている。5章「神を祭る文学」、20章「国学の恢弘」、21章「文芸の新しさ」である。時代区分でいうと5章は上代であり、20章と21章とが近世になる。ここではF 概念を5章から考えてみる。

◎神を祭る文学と芭蕉・宣長

(1) テキスト前半の上代「神を祭る文学」で何故芭蕉と宣長とが強い章共起をしているのか、実際のテキストに即してみる。この5章では祝詞がテーマとなっている。すなわち保田によれば祝詞が神を祭る文学の原態となる。この章の要約^{*F1}を以下に記した。

五. 神を祭る文学：要約

「祈ることと祭ることには区別があつた」という書き出し通り、「私事の願望による」祈りと「神と人とで納得しあふためのことば」の祝詞との違いや、祝詞が「神を祭る文学の原態である」ことを説明し、「その主要面で神を祭る民衆の文学だつた」風土記を用いて祝詞・祭り・民衆の係わりを述べ、文学は神を祭ることから発生し、祭りの必須条件の祝詞は善言美辞を旨とする意趣を文学の心とした。

(2) 次に、この章で芭蕉が最頻度をみせた段落を記す。なお引用中の園女(そのめ)とは芭蕉の門人である。

五章二節十段(抄)

芭蕉が特別に信頼した園女は、衣更への句に、たまたま当麻寺の中將姫蓮糸曼陀羅を拝んで、自ら織らぬ罪深さと吟じた。芭蕉俳諧の芸術性は、その思想にあつて、さらにその思想の根源には態度がある。態度は歴史の感覚にあつて、それが道として確立するきびしさに身をおいてゐる。芭蕉もまた神を祭る文学をはるかに思ふがゆゑに、きびしい辛苦の道を往つた。しかしその世界に「軽み」を見ることが出来た。～

この段落で保田は、芭蕉の芸術性を「思想、態度、歴史感覚、道、軽み」という積み上げで説明している。道の究極を「敷島の道(歌道)」とし、それをうち立てたのが後鳥羽院であるとは、保田が長年述べてきたことである。そうして、後鳥羽院のしきしまの道とは「神を祭る」態度なくしては成立しない。ここで初めて芭蕉と祝詞とが結合する。すなわち、神を祭る文学の祖は祝詞だったからである。

(3) 芭蕉が「神名帖^{*F2}」を携え、歌枕古跡の地を訪ねあるき、そこで歴史に涙したことを保田は『芭蕉』全編で詳述している。

「風雅論の歴史感覚」『芭蕉』(全集18、p139)

故人の跡を訪れ、その心を恋ひつゝ、国史を回想追憶し、こゝを訪れた代々の先人の心と同じ心境で感傷し、つひには慟哭する。この慟哭に於てわが文芸の意味がある。さういふ芭蕉の旅の心は、伝統の歌枕の地を訪れることだつたのである。そこには歴史があるから、精神の上で無限の深さを回想し得たのである。さうして旅を思ふ心とは、国史をしたふ心に他ならなかつた。

* F 1 谷口敏夫「日本語文章における要約と自動索引」光華女子大学研究紀要、33(1995)、pp47-81

* F 2 神名帖(帳)とは延喜式より、神々の名を記した帳簿、天神地祇総三千百三十二座

(4) 保田は宣長と祝詞との関係を、宣長よりは後の鈴木重胤に求めている。これは本編のF概念ですでに述べた。

◎神名帖

20章と21章とは一般論としては「国学」についてがテーマであるが、芭蕉と宣長との強い共起をみせた。本論はその淵源を5章「神を祭る文学」の祝詞にあるとした。その接点は芭蕉が神名帖を携えて旅をしたということにある。テキストから、保田の神名帖への言及を確認しておく。

(1) 保田は神名から、伊邪那美神の生んだ「火のヤギハヤヲ神」を例にして、火に関わる生産や生活の象徴をみる。

二章三節一段（抄）

～わが神々の御名は、基本の形では、かうしたむすびのくらしを象徴したもので、それはある意味では、はたらきを示し、従つてここに詩句そのままの美しさがる。しかし事物を眺めて形容をほめたたへるやうな御名もあつて、これはわが民族神話の伝承の一つでないこと、それが一つに融合し、しかも人為の権力的政治的統一の如き作為のなかつたことを現はしてある。だから神名の考へを、一つの思想によつて統一するやうなことは虚しい我意だと私は思ふのである。もつとも厳肅宏遠な神名の系譜が、わが大倭朝廷を中心としたものだつたことと、その神名の系譜が詩文学をよむやうな気分で誦される、誦すべきであるといふことは、古事記下巻に出てくる、歴代の天皇の御代を、ただその恋愛の物語で記録していつた歴史態度と合せ考へると興味ふかい。～神の系譜にあらはれる言霊の詩美を、根源の「文学」として考へるといふことは、代々の日本人の一つの詩情を形成するものだつたのである。～「古事記」や「神名帖」が、わが文学の歴史に無縁だつたと思ふのは、浅薄と評さるべき文学史観だが、遺憾なことには、近代以来の日本文学史とは、学者が外国の方法をまねて著したものが多いため、芭蕉が奥の細道の旅に「神名帖」一つをたづさへていつたことの、文学上の重大さや、文人創造の機微といつたことを直観することが出来なかつたのである。

(2) 保田は神名帖に物語を味わう。

五章四節三段（抄）

～むかし芭蕉翁が奥の細道の旅に、延喜式の神名帖をたづさへて行かれたのは、今人の多くが忘れた旅の用意の一つである。日本文学とか日本の文化史の終ひの境涯は、人が思つてゐるよりはるかにふかい。外にあるのでなく、内にある。これはあながち未来とか念仏とか、地獄極楽の説明の辞でない。それらの外来の教がわが世わが国にあらはれぬさきから、わが国人の心にあつた、いはば生き方だつた。伴信

友翁の考証になる式の神名帖をよむと、また古風土記をよむとも異つた物語の文学を味ふことが出来る。

(3) 保田は、日本では歴史と風景が一つに融合しているとし、神名帖が芭蕉にとっての時空間を案内するガイドブックであったと説く。

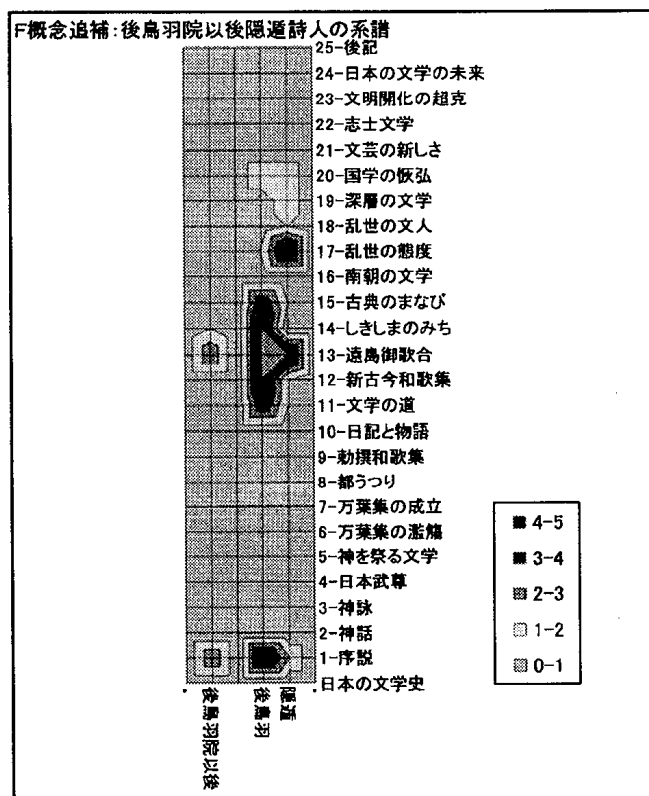
二十三章四節二段 (抄)

～歴史をもつ国に於ては、歴史は風景と一つであつた。芭蕉の旅の案内書は、曾良の証文によれば、千年の昔にしるされた神名帖だつた。～

F 概念のまとめ

F 概念は、淵源を 5 章にもとめ、その重要な言葉を「神名帖」とし確認した。多数の重要語が共起した 20 章と 21 章とは近世国学を記した内容であり、ここから保田の近世文学観をみることができた。すなわち、後鳥羽院以後途絶えた文学の恢弘を芭蕉におき、祝詞（神名帖）を媒介として、芭蕉と宣長とがつながっていると言う考えを、読みとることができた。

F 概念追補：後鳥羽院以後隠遁詩人の系譜



地図に現れた F 概念追補の絵解き

F 概念追補を地図の時系列にみてみた。これは保田の日本文学観である。

後鳥羽院以後隠遁詩人の系譜については、近世の芭蕉が中世の後鳥羽院をどのように発見したのかという所に保田の文学観がある。

◎芭蕉の「許六柴門辞」

保田には『芭蕉』があり、そこで芭蕉の「許六柴門辞」から後鳥羽院と芭蕉との関係

を述べている。

「有心と無心」『芭蕉』（全集 18、pp81-82）

「予が風雅は夏炉冬扇の如し。衆にさかひて用る所なし。たゞ釈阿、西行のことはのみかりそめに云ひちらされしあだなるたはぶれごとも、あはれなる所多し。後鳥羽上皇の書かせ給ひしものにも、これらは歌に実ありて、しかもかなしびを添ふると、のたまひ侍りしかとや。さればこの御言葉を力とし、其の細き一筋をたどり失ふ事なかれ。猶故人の跡を求めず、故人の求めたる所を求めよと、南山大師の筆の道にも見えたり」云々と云うて、風雅もこの道に同じと結んでゐるのは、まことに切々と心にひびく文章であつた。

～釈阿とは俊成のことで、「後鳥羽院御口傳」では、しきりにこの両者を讃め給うたが、芭蕉はそれを要約申して、「実ありてかなしびをそふる」という言葉で現したものである。～「さればこの御言葉を力として、其の細き一筋をたどり失ふ事なかれ」という意は、註釈の及び難い深い内容がある。

～私が後鳥羽院に対し奉つての芭蕉の関係といふことを申すのは、必ずしも一句の

みをたよりとして云ふのではない。しかしこの「柴門辞」の一句が、私に日本文芸の歴史といふことについての眼を開かせてくれたといふことは以前にも再々云うたことである。

この後鳥羽院の御言葉を力として、「其の細き一筋」を生きようといふことは、代々の詩人のいのちの考へ方だつたのである。～

「其の細き一筋」が隠遁詩人としての生であることに続く。隠遁とは具体的に、折々の政治権力とは離れた所にたつて、歴史を長い時空間としてみる態度である。詩人とは風雅を愛する態度であり、詩を誌すことが必須のことではない。ただし一筋が「歌」であると考えれば、国語でもって詩を詠むことが風雅を意味し、その詩とは哀しみをもつと同時に実もあるという、すぐれて力強い、芯の強い詩に重きを置くと考えて良い。「実」とは保田の場合一貫した志を意味していると解釈できる。

◎後鳥羽院以後隠遁詩人とは

(1) 保田はテキスト序説で頻りに後鳥羽院に言及する。

一章一節十段（抄）

～私は年少の日から、自分の文学の立場を、後鳥羽院以後の隠遁詩人の志といふものにおいてきた。後鳥羽院以後隠遁詩人の系譜を描く時、私の心はいきいきと躍つた。

(2) 後鳥羽院は新古今和歌集の実質の編者であり、同時に承久の変で鎌倉幕府に敗北した上皇である。これは朝廷の雅みやびという文化概念が政治に敗北し、隠岐に流されたという象徴的な事実である。隠遁詩人とは、隠岐以降の後鳥羽院自身もさすと考えて良いが、具体的には後鳥羽院の文化概念を温めた芭蕉などがその代表者となる。

十一章二節七段（抄）

～後鳥羽院の以後のわが朝の文学の道は、詩人の志に沈潜するのである。志がそのまま文学であり、志に従つて文芸はどのようにかへられようとも、或ひはかりに泥沼へ放擲しようとして、さほどのこともないといふやうな時代が、詩人から詩人へうけつがれた。もつともこの期間を通じて、朝廷に於ては、至尊の御調べはつたへられ、堂上の歌学学芸は、外観上はさほど衰へはしてゐない。しかし地下の詩人が、隠遁の姿を保つて、国々をあまねく歩く姿は、以前になかつた詩人の処世である。文学は志を恃し、それを述べること僅といふ姿となつた。～

(3) 後鳥羽院は承久の変(1221)を支点として文明への危機感をつのらせていた。歴史的に承久の変以後政治は完全に武家に遷った。そのことにより、古事記万葉集以来の文学の伝統を支える朝廷が衰亡していった。これは保田によれば文学の衰亡自体をさす。それをからくも支えたのが、中世以後隠遁詩人であったと説く。

十二章三節二段(抄)

～後鳥羽院が、琵琶、蹴鞠、鷹狩といった芸能の面から、さらに故実の学を御自遊オミツカラされたことも、この文明を危機感の中で、支へる信念と願望のおのづからに発したあらはれと思はれる。～日本の文学史は、この日の文人たちについて神の心を、やがておどろの下^{F+1}ゆく水の相の如く、まもりつたへんとしたものに他ならなかつた。武臣専権時代に、文人は自らの生涯を隠遁の詩人の生成に甘んじて、斯の道をほぼ自然のすがたで、ことさらに気張ることもなく守り伝へた。久しい戦国兵乱が治つて五十年、その平和と安逸な日に芭蕉は、彼ら代々の先人の思ひと志に、慟哭したのである。

◎芭蕉と後鳥羽院

保田は、後鳥羽院崩御によって断ち切られた文学の歴史を近世に恢弘したのが芭蕉であると説く。

十三章一節一段(抄)

後鳥羽上皇が隠岐で崩じられたのは、延応元年二月二十二日、宝齡六十歳、定家は二年ののちの仁治二年八月二十日に八十歳で薨じてある。延応元年は承久巳の年より十九年目である。頼朝開府を文治二年とすると、五十四年目である。後鳥羽院の崩御によつて、日本の文学の歴史の大筋は一応打切られた。

～

芭蕉翁が、元禄の国学復興の頂上で、義朝や義仲に異常な愛情を注いだのは、その以前の詩文学では殆どおほはれてゐた日本の民の心を、慟哭的にうたひあげたもので、その心は、儒風の大義名分の考へ方とは、少々色彩の異なる、しかも一般的な日本人のころだつた。上層者よりも民衆の情だつた。その詩の情にして、わが国人の謠物が最も大衆的に伝へた、文学のころだつたのである。芭蕉が旅の先々で、われを忘れて追悼句を、絶句の形で示したことは、すなほな日本文学の心だつた。一見の様相は、王朝の文学にくらべて、きはだつた変りやうだが、芭蕉は自然に一

* F+1 後鳥羽院「おく山のおどろの下を踏みわけて道ある世ぞと人に知らせん」(「増鏡」岩波書店、日本古典文学大系)。おどろの下とはいばらや藪の下を指し武家・鎌倉幕府専横の時代相であろう。「道」とは「敷島の道(歌道)」であるが、一貫した朝廷の雅、すなわち武断に対する文化概念を意味する。

つと思つてゐる。この自然に一つといふところで、後鳥羽院以後の詩人たちは生きてゐたのである。

以下隠遁詩人に関して保田が説くところを抽出する。

◎隠遁詩人の志

十三章二節一段（抄）

～隠遁の詩人がその志を持した根源は、ただに古今源氏を心にいだいてといふだけではなく、朝廷のおぎろない形で、深い沈みさへたたへて持続された、後鳥羽院に始るしきしまの道を忘れることは出来ない。述志や祈念は唯美の**ことば**で厚くつまれてゐた。その至尊調はほとんど無変化の、絶ゆることのない循環といふくりかへしだつた。～

二十章一節七段（抄）

～「近世奇人伝」は契沖を評して「千歳の一人」とたたへた。契沖によつて、国語の法則は殆ど正され、その文法によつて古代の文芸が、誰人にもたやすくよみ味へるやうになつた。学者としての仕事以上の、文人としてなすべきことをなされたのである。しかしながら後鳥羽院以後の代々の詩人は、みな多少はさういふ志の仕事を文学の上でしてきた。～罪なくして配所の月を見んといふ思ひは、本邦文人の一つの安心を形成したものだつた。早くにさういふ心をもつて、それをわが身の処理と観じ、流浪の旅を生涯とした西行の生成の理を、後鳥羽院が「誠あり」と批評され、芭蕉はこの御一言に、つひの生命と生涯をかけたのである。

◎隠遁詩人ともものあはれ

十三章二節七段（抄）

～ものあはれは、佛者の転法輪の思想や、儒家の勸善懲惡と、異質といふ他ないやうな、高次の文学の思想だつた。後鳥羽院以後の隠遁詩人は、それを知つてゐたのである。頭で知るまへに、身ながら知つて、風雅をしたふ、風雅の根源なる国語を正すといふ行ひにしたてて、それを生成の理として代々に伝へた。～

◎隠遁詩人としきしまのみち

十三章四節六段（抄）

～しきしまのみちの自信には、ことばが末も乱れぬとの、祈念のやうな、信心のやうな、熱い思ひがあつた。しかもそれは堂上の詩人を激化するまへに、草莽流離の詩人のしめやかな生甲斐となつた。列聖のしきしまのみちの御製は、身を投ずるやうな熱い祈りのあらはの歌ではなく、すべてが賀歌の範疇に入つた。賀歌であるといふことは、しきしまのみちが、智者の観念や学者の教理哲学でなく、^{カムナガラ}自然であり、自然にあるといふ反省を現はしてゐるのである。正しい国語をまもる、俗語を正すといふことばにおきかへてもよい。～

F 概念追補のまとめ

保田は「後鳥羽院以後隠遁詩人の系譜」という考えを親しく記してきた。古代、祭儀を司るのが朝廷であるという伝統に従えば、祭儀とは神を祭ることであり、そこから保田は「神を祭る文学」が生まれたと説く。芭蕉が延喜式による神名帖を携え各地をおとずれ歌ったのは、後鳥羽院によって確認されたしきしまの道に繋がっていたということが、このF概念追補によって明確になる。